

決着済みの歴史?

アンジェイ コズロフスキー (**Andrzej Kozlowski**)

ワルシャワ大学

闘争

太平洋戦争中に起きた、アメリカ合衆国のごく緊密な同盟関係にある二つの国に関わる、不明瞭な歴史上の挿話的事件について議論が闘わされている。それが合衆国の外交にかなり重大な障害をきたしているのであるが、国民一般の注意をひくことはあまりない。

その闘いというのは、いわゆる「慰安婦」に関することからで、慰安婦というのは従軍売春婦たちをさすのに、（あるいは論争の一方の立場からは性奴隷をさす、というだろう）第二次大戦中に日本軍が用いていた婉曲表現である。

この闘いの「戦場」はこれまで主として合衆国内で闘われ、地方レベルと国家レベルの両方である。使用されている武器は合衆国内に建てられているいくつかの「記念碑」 [web link \[LADN\]](#)、新聞記事、学校の教科書等であ

り、戦略目標はアメリカの世論に末長く影響を及ぼすことにある。

教科書論争

この現在係争中の論争のなかで最近の事件はベントレー(J.H. Bentley) とジエグラー(F.Z. Ziegler)著のマックグロウ ヒル(McGraw-Hill)校の歴史教科書以下[BZ].に関するものである。ウォール ストリート ジャーナル[WSJ1] は話をつぎのように紹介している。

1 2月日本外務省は合衆国の出版社McGraw-Hill educationに、ジエグラー教科書にある大戦中の日本の慰安婦プログラムについての記述を変更するよう要請した。それにたいして合衆国の高名な歴史家グループから抗議の書簡が送られた。

この記事には残念なことに問題になった一節が引用されておらず、また抗議している歴史家たち——かれらは「高名な」といわれているが、どの分野が専門の歴史家で、その歴史家がこの問題にどう関連しているのかは明らかではない——の書簡自体も紹介されていない。

そこでまず日本政府をそこまで不快にさせた、文章全体をみとめることにしよう。

大戦時における女性たちの経験はかならずしも彼女たちの尊厳や権利を高めるものではなかった。日本軍は14歳から20歳の20万人もの女性を強制的に徴募し徴用し、圧力を加えて「慰安所」あるいは「慰藉センター」とよばれる軍の軍隊の売春宿で奉仕させた。軍はこの女性達を部隊に天皇陛下からの贈り物であるとして紹介し、その女性達は韓国、台湾、満州、などの植民地およびフィリッピンその他の南アジアの占領地からきていたが、その大部分は韓国および中国の出身であった。

この帝国主義的売春業に強制的につかされると「慰安婦」たちは毎日20人から30人の男達の相手をした。戦地に滞在していたため女性達はしばしば兵士と同じ危険に遭遇しており、多くが戦争の被害を受けた。また日本兵に殺された者もあり、とくに逃亡しようとしたり、あるいは性病に罹った者はそうであった。終戦期にはこの運営の事実を隠蔽するため、兵士たちは多数の慰安婦を虐殺した。日本人兵士のための慰安婦所設立を推し進めた背後には、多くの中国人女性が集団強姦された南京の恐怖があっ

た。そのよう残虐行為を避けるため、日本軍はもうひとつの戦争の恐怖を作り出したのであった。戦後まで生き残った慰安婦たちは深い恥辱を経験し、自分の過去を隠し、あるいは家族たちから忌避される目にあつた。戦争後彼女たちには慰めも平安もほとんどなかった。

常識のある成人なら、日本軍が20万人の女性に売春を強制したと読めば、そして彼女たちが1日に20人から30人の男の相手をしたと書いてあれば、「戦地」における日本軍の規模がどれほど大きかったのだろうか、それを知りたいと考えるであろう。実際にはインターネットでそれはすぐに調べられる。ひとつは米国戦略爆撃調査団 [\[USS\]](#) である。そこには

日本人は戦争勃発時約170万、最盛期には約500万の地上軍を集結していた。日本軍医療記録からはソロモン諸島、ニューギニア、マーシャル諸島、ギルバート諸島、カロリン諸島、マリアナ諸島、フィリピン諸島、沖縄、硫黄島、およびアリューシャン列島に配備されていたのは総数約66万8千、そのうち31万6千の兵員が戦闘で死亡している。約22万人がビルマに配備され、うち4万人が戦死している。また中国には110万人が配備さ

れ、10万3千人が死亡している。残りはほとんどが満州、韓国あるいは日本本土に残留したか、あるいは決定的な合戦には参加していなかったかである。

と書かれている。したがって、全戦場の部隊は総勢200万以下ということになる。かりにその兵士全員が上述のとおり20万の女性との性行為に参加していたとしたら、いったいかれらはどうやって戦う時間やエネルギーをひねりだしたのか、到底想像がつかない。かりに「慰安婦」の自然減少率が10パーセント（その割合は中国の日本軍の減少率より高い）あるいは20パーセントとしても、現実的とはいえない性活動の頻度であり、さらにそれほど多数の女性を世話する膨大なコストも非現実的である。

ジグラー教科書でなされている主張がいかに驚くべきであるとしても、それは、ウォール ストリート ジャーナルのブログ [web link \[WSJ2\]](#) がそのまま認めている数字に比べれば、まだまだ控えめなのである。それによると、

最近の中国の調査研究ではアジア全体の慰安婦の総数は40万人、そしてその少なくとも半数は中国人である。

となっている。

するとどうやらこれらの中国の「調査研究員」が、さらに20万人の女性を中国国内に見つけたことになるが、そこに配備されていた日本兵はわずか100万人強である。このことはアジアにおける日本軍の条件についての、日本の歴史家秦郁彦氏が『ケンブリッジ日本史』のなかでしている次のような記述を読むと、なんとも興味をそそられる主張である。[IH2]

日本の国力が限られていたため急速に拡大する大東亜共栄圏を支えることが困難になり、日本は自分たちの不利な状況を補うため、スペインの初期植民地政策にも似た、各地での過酷な略奪政策をとったのであった。満州では土地が日本人移民の定住のために取り上げられ、中国本土では事業や企業が没収された。中国およびのちには太平洋で本土をはなれて戦っていた日本軍諸部隊は現地の食料に依存していた。軍は日常の必需品のため裏書のない軍票を過剰発行し、それが現地に必然的にインフレを招いた。近代の歴史において、外国への派遣軍が前線で食料を現地調達するという政策をはじめから取っていた例は他にはない。

こんな風に現地での食料に依存して生活しているような軍が、どのように5人に1人の割合の「慰安婦」を養っていたのか想像するのはかなり困難である。とくにこの兵士がそれぞれ1日に6回も性交渉をしなければならなかったとすると、どうだろうか。

次に当然でてくる疑問はなぜ日本人が、それほど多くの女性を「無理やり徴集し、圧力を加えて連行する」必要があったのだろうか、ということである。他の多くの軍隊がやってきたように、プロの売春婦のサービスを受けるほうがずっと容易ではなかったか。実のところ、それが第二次大戦中、また別の戦争においても、ある場合は公的に、ある場合はそれほど公式にではなく、軍がしてきたことなのである。（人種的純潔を守りたい願望というよりも）軍の公娼のおかげで、ドイツ国防軍が犯さなかったわずかな戦争犯罪のひとつが、大規模な強姦であった。

第二次大戦後合衆国軍は、ベトナム、韓国、そして日本にも、「公認の」軍隊用売春宿を維持した。太平洋戦争中は非公式な方法がとられており、それについては[web link \[MMN\]](#)に記されている。なぜ日本帝国軍は同じ方法をとることができなかったのだろうか？日本人は中国の、北（時には南）朝鮮の宣伝文句にあるような、根か

らの悪魔的なサディストなのか？ それとも費用節約のためか？ あるいは韓国で、中国で、また日本でも売春婦が足りなかったのか？（もし足りなかったというのならこれらの国を最近訪れたひとはさぞびつくりすることは間違いない。）あるいはもしかしたら韓国の売春婦たちはあまりに愛国的で日本人兵士のためのそのような仕事を‘為すに耐え得なかったのか’もしれない。ところで280万人の韓国人男性（現韓国大統領の父親を含む）は日本のために戦うことを志願し、非常に献身的に勇気をもって戦い、あるいはまた1938年から40年にかけての「自発的兵士制度」のもとに、日本の捕虜収容所のキャンプの監視員の業務にあたっていたのだが。（かれらの献身的な振る舞いは、しばしば雇った日本人の期待を超えものであった）。[\[BP\]](#)慰安婦のうちの少なくともいくらかはそのサービスで報酬を得ていた売春婦であつただらうと考えてよいと思われる。1930年代の韓国の新聞に出されていた、そこでは有名校の卒業生が得る給料より何倍も高い報酬が得られるという慰安婦の広告が残っている。

多くの日本人兵士が日本人女性のほうを好んだというのもごく当然のことと思われる。ジグラーの教科書では言及されていないが、たしかに日本人「慰安婦」もい

た。なぜそれを言及したくないのだろうか？ もしかしたらアメリカの学校の生徒であっても、まさか日本兵が自分の妻や姉妹を「無理やり徴用して軍の売春所へ連行した」とは信じないからではなかろうか？

さて、次にウォール ストリート ジャーナルが「高名なアメリカの歴史家」[\[AD, HA\]](#) とよぶグループの抗議の書簡をみてみよう。その書き出しは驚くべきである。

われわれは歴史家として、日本および他の国における歴史教科書において、第二次大戦中に日本帝国軍に奉仕する非人間的な性的搾取の制度のもとで苦しんだ、婉曲に「慰安婦」とよばれていたひとびとについての言明を抑圧しようとする、最近の日本政府の試みに、ひどい驚きと失望を表明する。

歴史家たちは今も、搾取された女性の数が何万人であるか何十万人であるか、また軍が厳密にいかなる役割を果たしていたのかをひき続き議論している。しかしながら、日本政府の公文書記録における歴史家吉見義昭の注意深い研究調査とアジア全域にまたがる生存者の証言は、国家によって支

持された性的奴隷制度の基本的な特色をまったく疑いの余地のないものにしてている。多くの女性たちは本人の意思に反して徴集され、前線の慰安所に連れて行かれ、移動の自由を断たれたのである。生存者は将校たちに強姦され逃げようとするとひどく打ちのめされたと記述している。

これ以上、弁護されている当の事柄を破綻させる弁護が書かれたためしがあるだろうか。

もし「歴史家たちは搾取された女性の数が何万人であるか何十万人であるか、また軍が厳密にいかなる役割を果たしていたのかをひきづつき議論している」のであれば、これらの「高名な歴史家たち」いかにして、自分の専門領域において議論の対象であることに触れずにアメリカの子供達にその数は20万人であったと、教えてよいと正当化できるのだろうか？

「。。また軍が慰安婦の調達、斡旋において厳密にどのような役割を果たしたのか」これもまた決定的な問題ではないだろうか？ もし厳密にどのような役割を果たしたかが議論されているのであるならばどうして、他の情報を入手できない子供たち用の教科書に「日本軍は、「無理やり徴募し、圧迫を加えて連行」し、軍はその女性た

ちを天皇からの贈り物であると部隊に紹介した、と述べることができるのだろうか？

しかしこれ以上にショッキングな違いは、「また日本兵に殺された者もあり、とくに逃亡しようとしたり、あるいは性病に罹った者はそうであった。終戦期にはこの運営の事実を隠蔽するため、兵士たちは多数の慰安婦を虐殺した。」というジグラーの教科書からの言明と、生存者が将校に強姦され逃げようとするときひどく打ちのめされたという歴史家たちの書簡との間の隔たりである。その違いが単に主張の趣旨がちがう——「殺された」と「強姦され」「逃げようとしたために打ちのめされた」（こうしたことは通常の民間売春宿ではごく日常的におこる）、——ということのみならず、その主張のしかたの確信度の違いである。書簡を記したたひとたちがジグラーの教科書でなされている主張の恐ろしい意味合いに気がつかなかったということはある得ない。そしてまたこのような殺人というようなことについてはまったく証拠がないということ、のみならずここでなされている主張が日本軍の降伏時の振る舞いについて知られていることのすべてと矛盾すること、また常識にも反すること、にも気がついたはずである。日本の戦犯収容所の司令官がそこで犯されていた戦争犯罪について知っていた

ことは明らかであり、連合軍に責任をとらされるであろうこともわかっていたことは間違いない。しかしそれを隠蔽するための手続きはなにもとらなかつたし、ましてや証人を殺害したというようなことはない。たしかに戦争を全滅するまで続けるということになれば日本人はきっと捕虜を皆殺しにする予定であつたであろう。しかし天皇の降伏決定を知つてからは、かれらは模範的に軍律守つて行動している。

外交官でもあり、インドネシアのサンファレ[SF]で捕虜となつていたある英国海軍将校は、自分たち捕虜は、連合軍が上陸した場合には自らの墓場となるべき塹壕を掘らせられたが、しかし突然配給食が増え、収容所の司令官が将校たちに英語で次のようにいったと記述している。

みなさん、天皇陛下はこれ以上の流血を避けるために戦争は終えるべきだと決心されました。みなさん、あなたがたは自由です。次回はわれわれが勝ちます。

と。捕虜収容所の何人かの監視員は裁判にかけられ絞首刑になった。証拠を隠蔽しようとする試みはまったくなかったのである。また有名なユダヤ系インド人将軍 J.F.R ジェイコブも英軍インド軍の将校であった折にインドネシアでの日本人の降伏の様子を目撃している。かれが書いている日本人降伏についての文章である。

敗戦に際しての日本人は規律にしたがい、尊厳をもってふるまっていた。かれらが供給した任務分隊は能率そのものであった。仕事を与えられるとかれらはだまってできぱきとそれを果たした。

[JFR]

もし日本人が追求されるとわかっていながら戦争犯罪を隠蔽しようとしなかったのなら、なぜかれらがけっして追求されないとわかっていたことを隠蔽するために恐ろしい犯罪を犯すことがあるのか。勝利を誇る連合國は慰安婦制度があることを完全に知っていたが、それでも慰安婦に関連した戦争犯罪として記録されているのはただ一件だけである。それはオランダ人女性のオヘルネさんがジャワの抑留所から日本兵によって無理やりに「慰安婦所」へ連行された一件である。二ヶ月後彼女は日本の上級将校の命令で解放され、その将校はその売春宿を閉鎖した。この件で 11 人がオランダの軍事裁判所で裁判

にかけられ、ひとりが処刑された。ほかの事件ではそのような裁判がなかったということは、日本人が「この運営を隠蔽するために」慰安婦を殺害したという主張がいかに理屈にあわないかを示している。

この事件にはオランダ領東インドのセメラングにあった軍事売春所むけの「慰安婦」として徴用された200人から300人のオランダ女性が関わっている。この話は詳しく記述されているが、（[\[CSS\]](#) p. 20,） 極めて重要なのでもういちどこで繰り返しておきたい。オランダ裁判所は65人の女性が売春を強要されたと判断している。ひとりの少女が16歳であることがわかったので、日本人は収容所に送り返したと記録している。その二ヶ月後、東京の司令部の参謀将校 小田島薫大佐が

ジャワは視察に出かけたおりに強制徴集の事実を発見した。

女性たちは直ちに解放され、スマランの3箇所の慰安所が閉鎖された。日本敗戦後この強制徴収に関連した将校がオランダ裁判にかけられ処罰され、一人が絞首刑となった。

あきらかに、この話の最も著しい事実はオランダ裁判所が女性のうちの少数者が売春所で働くように強制されたと判断したことで、つまりはほかの多数の女性は別の理由で働いていた、ということである。同じ事実は生存者の証言からも確認されていた。これとは対照的に、[\[CSS\]](#)にも指摘されているが、韓国のメディアによれば（アメリカの歴史教科書の著者たちも同様である）すべての韓国の慰安婦が性の奴隷であって、慰安所で奉仕するように騙されるか拉致されて連行された、ということである。

抗議書簡に署名した歴史家たちは、少なくともベントレー氏やジグラー氏よりは、自分たちの評判を大事にするひとであった。かれらはその教科書（あるいはグエンデールの記念碑）にかかっている法外な主張にかかわることは注意深く避けている。かれらは「歴史的議論がある」ことすら認めているのだが、もちろんその論争の両側を対等には扱っていない。書簡は表面的には「日本の歴史家たち」の擁護のためにかかれており、すでに「確立した」（これはむしろ「決着された科学理論」という意味での「決着した」いうべきか）歴史を擁護し、その自由が日本政府および保守派政治家によって、そして「極端な右翼」によって脅かされている、ことになっ

ている。しかしながら、実際に名前があがっている日本人歴史家のはただ一人、中央大学の吉見義明、でかれの歴史家としての評判は主としてかれが1993年にひとつの文書を発見したことに基づいている。その文書はすでに太平洋戦争についての軍事史家たちには以前から知られていたことを確認したもので、日本陸軍が日本部隊が駐留していた国々に軍用売春宿を設立していたということである。抗議書簡に署名した歴史家たちのなかには軍事史家はひとりもない（その大多数は日本の現代史家ですらない）にもかかわらず、その書簡のなかで「確立された史実」について語り、その史実にたいして「右翼と安倍晋三政府が「法律的な議論を用いて」疑問をなげかけようとしている」のであり、そして生存者の名誉を毀損した」といつている。そこに書かれていないのは、日本の多くのすぐれた歴史家が、アメリカ人の書簡署名者とおなじく「高名な」歴史家であるのみならず、さらに日本現代史の専門家たちが、まさにベントリージージャーの教科書に疑問をなげかけたことである。そのうち19人が教科書の変更をもとめる書簡に署名している。

この日本人歴史家の書簡に署名した一人は太平洋戦争の軍事史の大御所であり、この問題について多くの著書や

論文があり、そのうち英語で発表されたものや、英語訳が出ているものも多く、また、ハーバード大学やイスラエルのヘブル大学等の優れた大学の特任教授を務めた秦郁彦氏である。秦氏はもちろんこのような議論がおこるずっと前から慰安婦の問題について知っており、また日本人慰安婦に知り合いもあって、その何人かは旧兵員との記念会合に出席すらしている。秦氏は慰安婦問題については非常に注意深い研究をしており、その結果がここにまとめられている。[web link](#). かれは慰安婦の総数は約2万（そのうち日本人は40%）と推定している。ジャパントイムズ [\[JT\]](#) の記事での吉見氏の推定は少なくとも5万人、100人の兵士にたいして1人の慰安婦という割合になる。もしかりにそうであったとしても、部隊の兵士に見合う慰安婦が配分されたと仮定して、慰安婦の大多数は日本におり、次に韓国（そこでは普通の売春宿がある）で、ベントリーとジーグラの教科書にあるコメントがこの状況には合致しないのはあきらかである。。

もうひとりの署名者は国際キリスト教大学の韓国史の専門家西岡力氏で、慰安婦問題を詳しく調査研究してお

り、かれの論文はこの問題の」背景とさらなる情報を得るのにぜひ一読をお勧めしたい。[web link](#)

イデオロギー的には非常に異なった面から書かれているが、極めて貴重なのが サラ ソウ (C. Sarah Soh) の著書『慰安婦たち』 [\[CSS\]](#). である。いくつかの点でこれは不思議な著書である。その道具立として用いられている装置としては左翼、フェミニストの社会学ないし文化人類学を用いており、いくなれば伝統的マルクス主義の多少正統から外れた変種といった感じである。

[\[LK\]](#). マルクス主義がそうであるように、その装置の概念部分は完全に政治的イデオロギーにどっぷり浸かっている。保守的な歴史家、あるいは単なる実証主義的な歴史家であっても、この装置はまったく使えないし、基本的に役に立たない。それに、この種のアプローチはわずかに分析とみせかけながら、各所に教訓的な判断をちりばめているが、しかし伝統的マルクス主義とちがって非難したものに替わる見解を提供していない。たとえば「資本主義」はマルクス主義にとっても、現代の左翼社会学にとっても、諸悪の根源ではあるが、しかしマルクス主義がそれを治療するものとして独自のユートピアを提供しているのに対し、社会学はただ敵を断罪するだけで終わっている。マルクス主義者は具体的な代替案にコミッ

トしているわけ（都合に応じて絶えず変わるとはいえ）だから、とにかく少なくともその替案に対して反駁できる（かれがそれを受け入れるかどうかはまた別である）。「資本主義は人間による人間の搾取であり、社会主義はその逆である」という古い冗談がまさに真であったことは、われわれの経験がはつきりと示してくれた。この本の主たる関心事である領域では、「解放された」ヨーロッパにおける、またドイツにおけるソビエト軍の振る舞い、またカストロ下のキューバにおいて売春が続いたという[MH]のような数多くの現象が、この種のイデオロギー的主張の反証となる、と議論できるのだが、しかし左翼の社会科学は反論には動じない。驚いたことにはそして幸いなことには、ソー教授の本は決してイデオロギーばかりではない。イデオロギー的なところをとばし、いらいらさせる決まり文句を気にしないことを覚えれば、この本には極めて有用な歴史的情報がふんだんにあり、かつ証拠を独立の資料にあたって比較し、それぞれ違う見地からも検討するという、伝統的歴史分析方法も多くみとめられる。多くの点でその結論は、それほどイデオロギー的に偏ったテキストよりもずっと優れており、著者は未だに赤の色眼鏡をかけてはいるが、青い色もきちんとはつきり見ているという印象をたびたび受ける。このことから、著者はもうひとりの真に独立の証人

とみなされる権利がある。とくにソーの本は次の点でベントリー＝ジグラーの教科書でなされている言明にたいするあきらかな反証を提供しているのである。

1. 1. 韓国の慰安婦が日本人に強制的に徴集されたというのにはありそうにないこと、韓国においても日本国内においても、慰安婦を集めなければと焦った一番の理由は 主として太平洋戦争以前からの経済的、社会的条件にあったこと、そして慰安婦制度は実は基本的には日本にあった平時の公娼制度の延長であったということ。中国と南アジアの国々における戦地での強姦と女性の拉致があったことは、まず疑いないことで、第二次大戦ではすべての戦線でそうだったのであるが、ただそれは日本軍の方針には含まれておらず、それが起ったのは、終戦近く、多くの中央司令部のコントロールが多くの部隊に効かなくなるにつれて、頻繁になったのであった。多くの韓国の女性達が親に売られ、あるいは韓国人徴集業者に騙されたが、それは実際には韓国と、それほどではないが日本でもなされていた、公娼を集めるごく普通のやりかただったのである。
1. 2. この問題について、多くの「犠牲者の証言」が世界に大きな影響を及ぼしているが、あきらかに、ま

た実証可能な意味で偽りである。（（ヒストリー（歴史）をつくるストーリー（話）[CSS].第2章）

2. 3. ごく普通の慰安所の女性たちは、通常は「奴隷」ではなく、韓国や日本の公娼所にいた売春婦は通常は限られた契約期間だけ働いていた。普通の慰安所で暴力が用いられるつことはまれであった。ソーが「違法慰安所」.“criminal ianjo” とよぶものはフィリピンなどの前線地帯で終戦前の、中央の管理がゆきとどかなかつた数ヶ月間に出現した証拠があるとされている。これらの「違法慰安所」は軍部隊が打ち立てたもので、暴力と強姦が、意に反して拉致された犠牲者にたいしておこなわれた。あきらかにこれらの違法慰安所は軍の方針として開設されたものではなく、（かれらは通常の慰安所を開設する主旨である健康上の規則にすらしたがっていなかった。）敗戦のときにしばしば起こる軍のする略奪の一例であり、戦争法からするとそれは、その略奪者が従事していた軍の責任ではない。
3. 4. 韓国における慰安婦問題の話は多くの場合韓国ナショナリストによってかりたてられたもので、かれらはないものを発明し、偽造し、韓国内部にある異論を抑圧しているのである。

アメリカの歴史家の書簡の署名者たちはおそらくこうした事実気づいており、またベントリー＝ジグラーの教科書にある言明と史実との間の矛盾にも気づいているのであろう。（かれらは歴史的な論争がある、と認めている）。かれらはおそらく書簡はこうした教科書の主張を支持するのではなく「学問の自由」を擁護するためだといいたいのであろう、と考えるしかない。（かりにこの場合の自由とは学校の生徒たちに目下歴史家のあいだで議論されつつある歴史的出来事についての、もっとも極端な説を与える自由であるとしても。） 実に、かれらはこの種の自由を否定するのは日本だけではない、と認めている。

われわれは、歴史を自分の利益のなるようなやりかたで」語ろうとするのが日本政府だけではないことを認識している。アメリカ合衆国において州あるいは地区の教育運営委員会が教科書を書き直して、たとえばアフリカ人の奴隷制の説明を曖昧にしたり、ヴェトナム戦争への「愛国的でない」言及を削除したりしようとしている。2014年にはロシアは第二次世界大戦におけるソビエトの活動について、政府が偽りであると判断するよう

な情報を普及させるのは違法であるとする法律を制定した。今年アメリカの大量虐殺の100年記念に際して、ひとりのトルコ市民が政府に責任があるといったために逮捕されるということがありうるのである。しかし日本人政府は今、国内、国外における歴史家の仕事を直接に攻撃しているのである。

この「高名な歴史家たち」の書簡の口調からして、アメリカの『州や地方の運営委員会』がロシアやトルコ（もちろん日本）とともに、「自分の利益のために歴史を物語る」最悪の反則人にされているのは驚くにあたらないのかもしれない。そしてまたこの違反行為が、なぜか政治的な分割線の片側にいるひとだけが犯すものだというのも驚くにはあたらない。合衆国ではあきらかに、政治的左翼からはイデオロギー的により好まれる（つまりは「政治的に正しい」？）歴史的物語への圧力などというものはないのだから。ベントリー＝ジグラーの教科書についてカルフォルニアの教育委員会から許諾をもらおうとするのに重要な役割を果たしたひとが、なぜか注目を集めた中国生まれのカルフォルニア州もと民主党上院議員レーランド イン イエLeland Yin Yee）であったというのは、もちろんごく偶然である。かれは現在汚

職とフィリッピンのイスラム系テロリストへの銃の密売の嫌疑で告発されている。しかし、それにしても、この特定の歴史的論議に巻き込まれ「歴史家の仕事を攻撃している」と非難される側に立たされているのが日本だけだというのは驚くべきである。もしかしたらこの「高名な歴史家たち」は北朝鮮や中国の名を上げる意味はないと感じているのだろうか。（もっともウォールストリートジャーナルは真顔で、「中国の歴史家たちの研究」を引用する用意があるようであるが）、この文脈からすれば韓国のアーン（Ahn Byeong-jik, ）、リー（Lee Young-hoon ）その他の優れた韓国学者たちがアメリカの子供達にベントリー＝ジグラーの教科書が提供している慰安婦の歴史は主としてナショナリストの宣伝である」と論じたために中傷と公然の侮辱を受け、身体的攻撃をされ、逮捕するぞという脅しをうけているというのに？

その起源

1977年と1983年とにスターリン時代の日本共産党党员であった吉田清治と呼ばれる日本人が戦争回顧録を出版し、そこで日本帝国軍の兵士であったときに、韓国チェジュ島（済州島）の205人の韓国人女性を拉致するのに関わったと告白した。この女性たちは拉致されてのち日本軍の性奴隷となるように強制されたという。

吉田氏の著書はかれを有名にした。かれは日本と韓国で多くのインタビューを受け、講演もした。そこで公に自分の罪の赦しを乞うたのである。ある韓国テレビ局ではかれの話連続シリーズで放送した。日本のメディア、とくに日本の最大の新聞である朝日新聞はこの証言を額面通りに受け取って吉田の本と証言による18本の記事を載せた。朝日新聞内のだれも吉田のスターリン時代の過去を気にならなかった。吉田が日本共産党のJCPのメンバーだった時代には党は要するに日本におけるKGBの延長支部だったのであり、新聞も1970年代にはいわばKGBのための宣伝機関として働いてしていたことは、確実である。[AM] 1970年代にKGBのために働いていた日本社会党の党高層部については、ミトリョーヒンはかれらの動機が「経済的及びイデオロギー的」なものであったと記している。以後明らかになった

ように、それがまた吉田の動機をも正確に記述するものであった。その理由で、また便宜上からも、ここでは以後吉田氏の、また吉田氏の影響を受けてつくられた慰安婦についての話を「党路線」(party line) ないし「路線」とよぶことにする。

1991年、中央大学の日本現代史の教授吉見氏は日本軍が「慰安所」を設立し経営したことを「証拠立てる」日本政府の公文書を発見した。この発見は吉見を有名にし、また吉田氏の「告白」とともに、日本の内閣官房長官河野洋平が提出した1993年の公式の謝罪にいたるのに役立ったとなったと考えられている。

吉見の「発見」にどうしてこれほどの意義が加えられたのかは、軍事史にほとんど興味のないひとにも、奇妙な感じをおこさせる、というのは、だれでも専門の軍事史家にせよ、太平洋戦争に興味のある素人にせよ、日本軍の慰安所があったことはずっと前から知っていたのだし、それはヨーロッパの第二次大戦について研究している歴史家なら、似たような軍の売春所がドイツ空軍によって運営されていたことを知っていたのと同様である。この文書の意義にかんして、むしろ興味深いのは、吉見が発見した公文書が、ジークラーの教科書に書かれ

ているいるのとまさに反対のことを述べているからである。

その文書はたしかに日本軍が外部の仲介者に慰安婦の雇用をまかせたことを認めており、その仲介者のなかには誘拐や詐欺を働いて警察に捕まった者があつたことをみとめている。この文書は以後の雇用にかんしては「軍の信用を落とさないように」また、「社会的に認め得る基準を破らないで」気をつけてことを運べと勧告しているのである。どうしてこの文書が軍が何千にも女性を「無理やり徴集。徴用し、強制連行した」ことを政府が認めていた、という意味に転じるのか、ということは、プロパガンダが奇跡を達成することを身にしみて知っているひとだけが理解できる。

1938年3月付の文書は何人かの個人が中国で慰安所ではたらく女性を徴用しようとして警察に逮捕されたということを述べており、だから軍の権威を傷つけることがないように、また「社会問題を起こさないように」、警察と協力してもっとその仕事に適切な仲介者が当たるようにと述べている。

この文書はたしかに曖昧なところがあつて、徴用の手続きは厳密に日本の法に従うように（その場合は彼女ら自身の合意のもとに、登録済みの売春婦を雇用することを認める）とも解釈できるし、あるいは日本軍はその法を破るにあたって、当局と協力すべきであると言っているともとれる。朝日新聞は直ちに後者の解釈を採用し、全体主義的な宣伝が必ずやるのとそっくりなやり方でさらにこれを拡大解釈し、これこそが日本軍が8万から20万人の勧告女性を誘拐し、あるいは騙した証拠である、とした。この文書が触れているのはただ日本人女性を騙そうとした、ということだけである。

話の残りは日本における宣伝作戦の完全な崩壊と、その後の海外とくにアメリカ合衆国への宣伝活動の移転である。1992年、秦郁彦氏は吉田氏が勧告女性を拉致した主張した濟州島へ出かけた。そして吉田氏の主張がまったくの捏造であることを確立するのに時間はかからなかった。その後4年経って吉田氏自身がこれは作り話であることを認めている。朝日新聞は吉田氏の今は根拠のない主張にもとづいて、自ら発表したすべての記事を否定することで、窮地を抜け出そうとした。そして自分たちは“偽証者の犠牲者”であるとまで演出した。ついには民間の抗議によって朝日新聞主幹は辞職させられた。

朝日現在合衆国在住の2万人の日本人によって訴えられており、合衆国内の新聞に自社が出版した偽りについて謝罪広告するように要求されている。

ニューヨーク タイムズは自ら抱える無数の「吉田」たちについて一度も謝罪したことがなく、ワルター デュランテイ (Walter Duranty) は、そのうちでもよく知られた「吉田」のひとりにすぎないのであるが、かれは朝日新聞を批判することは出版の自由と民主主義にとっての重大な脅威であると批判宣言をしている。

またそれと同時に、ニューヨークタイムズ自身が「拉致の主張」を撤回し始めており、次のことを認めてさえいる。

：日本軍が、戦勝勃発時にはすでに植民化されてから数十年間たっていた韓国で、女性たちを拉致したあるいは直説に女性たちを騙すのに関わったという証拠はほとんどない。。。’

ここでいう、「ほとんどない」は実際には「まったくない」である。いつものように、ニューヨークタイムズ NYTは、「不特定の修正主義者」の否定行為を非難しづつけるが、だれがなにを否定しているのかは決して述べ

ようとしなない。もちろんニューヨークタイムズはそれがもつとも重要になると「否定」する、のが非常に得意である。ホコロースト（ユダヤ人虐殺）が続いている間はこれを否定した[LL],し、それが続いている間はホドロメル（ソビエトの強制的集団農場化によっておこされたるウクライナ人の大量飢餓 1932-33）を否定し[HOL]、ハマス、[PA]（パレスチナ自治政府）、ヒズボラ、イランのイスラエルおよびユダヤ人にたいする集団殺戮の意思を否定しつつ[CA]たし、まだまだ他にもあるが、しかし証拠についての議論で敗北すると こんどはだれが否定したのか、そちらの犯人探しをはじめ。秦氏も、その他尊敬されている歴史家はだれもいくらかの女性たちが騙されて徴集され、あるものは両親に売られ、なかには仲介の売人に誘拐された場合があつただろうことを「否定」しない。そのようなことは、韓国でも日本でも民間の売春所ではよく行われていたのである。かれらが否定するのは、二つの重要なことで、日本軍が日本と韓国の法律を意識的かつ組織的に破ることに関わっていたということ、そして慰安婦の徴集が、植民宗主国（日本）が植民地（韓国）にたいしてなす犯罪行為である、という二点である。

「犠牲者版」

吉田証言の偽りが暴露されたことで生まれたもうひとつの結果は、いわゆる「気象科学」に極めてよく似ている。つまり、ジーグラの教科書にあるような主張や数が吉田の発明とはまったく関係のないことで、それが尊敬されている歴史家の研究によって確認された「決着済みの歴史」を代表している、という、そしてそれに疑義を挟むものは「右翼のナショナリスト」であり、「修正主義者」であり「否定する者」（これは暗にホコローストを否定する者との比較を誘うようにできている）である、と。

だがしかし、どの歴史家がこの「路線」を確認したのだろうか？ 19人のアメリカの歴史家の書簡の著者たちは確認者の名を一人もあげておらず、言及されているのは吉見義明氏のみである。これを主張している立場からすると残念なことに、吉見氏はずっと前に日本軍がいかなる拉致行為にも関わったという見解をずっと前に捨てており、日本軍は誘拐事件をきちんと調査し、犯人を罰して、犠牲者を家に帰さなかった責任がある、という見解をとっている。[\[JF\]](#) 吉見氏はまた日本軍が慰安婦制を設立したことを非難しており、これが万事の元凶であるとしている。世の常識のあるひとならばだれしも世界に戦争がなく、軍隊も、売春も、そのほかもろもろがなけ

れば、ずっといいということを否定できない。しかし、ウクライナの経験がいかにも鮮明に示したように、軍をもたないこと、そしてただ国際的な保障に頼ることは、決して戦争を予防しないのみならず、むしろ促進するのである。ベルリンに侵攻したソ連軍がいかにもまざまざと示したように、軍の売春制度を持たないことは、決して軍のよりよい振る舞いを保障するものではない。

吉見の意見に賛同して、日本軍はすべての慰安婦が本人の意思に背いていなかったどうかをチェックすべきだったと言うのはたやすいことだが、もし本当にそれを実行したとしたら、それは、当時の太平洋戦争期、あるいはそれ以後の他の軍に比べて、極めて異例なことである。すべての軍は売春について、それが軍の公営のものであれ、非公式の民間の売春所であれ、何かの形で対処している。そして実際当時（今も）売春婦の売買取引ということはごく普通に行われていたのである。それに日本でも韓国でも、若い女性が売春婦になるのは親が借金を返すために売られるというのがもつとも多いケースである。借金が返済されるまで女性は働かなければならない。この点で日本軍が民間の売春よりずっと高い基準を設けるということは、まず無理な話である。

アメリカ合衆国軍が「非公式の」サービスに頼っていた太平洋戦争中にせよ（詳細は、あるいはその後日本、ヴェトナム、韓国に公娼所を設立したときにせよ、（詳細は[web link \[MMN\]](#)） 軍がより高い基準を守ったと考える理由はない。ドイツ国防軍は、先に述べたように軍の売春所を占領国中にもち、多くのポーランド人女性を含む占領国の女性たちが売買取引の犠牲になり、勝手に売春所を離れることはできなかったということを示す多くの証拠がある。[CG]. ドイツ軍売春所での女性たちの待遇が、日本の慰安所よりひどかったことについても多くの証拠がある。しかし日本とちがって、ドイツはこれにたいする謝罪も賠償金を払ったこともなく、それを要求されることすらなかった。（しかしなぜかメルケル首相は日本人にきちんと過去を反省し悔恨の意を示すべきと教示している。）さらにこの問題について、賠償あるいは謝罪、あるいは国際的決議といったものは皆無である。売春所で働いた女性たちは、その正当性は別として、占領下にあった国の国民によって敵国協力者とみなされ、占領終了後は報復されなければ幸運という状況であった。そして以後ずっと、もと売春婦たちを弁護する声はほとんど上がらなかった。それがはじまったのは、実のところ、韓国と中国の状況は同じで、国家主義者（ナショナリスト）が、（そして中国では共産党体制

が) がこうした事態を日本の国際的評判をたたき落とす
宣伝戦の道具として使える、ということに気がついてか
らのことである。

(ドイツの軍事売春所につとめていた女性の総数は約3
万人と推定されている。戦闘に加わったドイツ諸部隊の
総数は2000万である。日本の動員数は600万人で
ありそのうち戦地で働いていたのは2100万人だけであ
る。)

拉致問題に関しての敗北をみとめた日本左翼は、こんど
は慰安婦の待遇問題に向かい、彼女たちをすべて「性奴
隷」と記述した。この表現は曖昧であり、日本や韓国の
民間ではたらく売春婦のほとんどにあてはめることがで
きるので、日本軍の「慰安婦」の雇用が特別な戦争犯罪
であると申し立てるためには通常予想されるよりももっ
とひどい仕打ちの証拠を探さなければならず、となると
それは拷問とか殺人でなければならなかった。

しかしながら実際にそのような虐待をみたという証言は
まったくなく、なにかあればそれは噂であった。

韓国女性の誘拐の(決して殺人や拷問ではない)。唯一
の直接的な証拠は少数の生存している、韓国のもと慰安

婦である。これらのもと慰安婦たちが進み出て自分の話を語りはじめたのは吉田氏の暴露のあとであり、彼女たちの大義が韓国メディアと政府によってとりあげられた時である。吉田の話が完全に信憑性が失われたのだから、（他者からも、自分自身でも認めて）こちらは吉田の話と朝日の記事とは何の関係もないと論じるのが「路線」の要であり、韓国テレビの連続放送は慰安婦の証言にもとづいており、突然年老いた韓国の慰安婦たちが公の目にふれることになったのである。しかしながら、これについてはもっとシニカルにとることもできる。この問題についての韓国政府が強力に積極的に関わっていることから、そのときどきによって慰安婦の証言の間に相当な齟齬がおきていることである。（実は、サラ ソウの本の第2章には同じ女性が異なったときにしている証言が詳しく記述されているし、2 of [\[CSS\]](#) また、秦氏の記事, [\[IH1\]](#) でもと慰安婦リー ヨン ソーの「拉致」についての話には9つもちがったバージョンがあるとなっている）それが記憶が薄れているとかトラウマが大きすぎたから、という理由ではとても説明できない。

被害者の証言は常に正しいという考えは常に危険である。特に生存している被害者の数が総数に対して占める

割合がごく小さいとき、そしてとくにその少数の被害者が今日の韓国にみられるような政治的に極めて緊張した雰囲気の中に置かれた場合にそうである。韓国の、高齢のもと慰安婦が、まさか自分はお金のために（あきらかに高給だった）日本軍の売春婦になったと公に言えるだろうか？ またかりに、生存している韓国慰安婦のすべてが騙され、あるいは拉致されたと証明できたとしても、それが韓国における日本軍が組織的に日本国法に背いていたことの証拠になるだろうか？ それか、いま知られている当時の日本および韓国が置かれた条件とまっこうから矛盾するとしても？ [\[MP, BAS\]](#).

この議論のなかで時折おこるもつとも恥知らずなことは、こうした主張をホロコーストの否定に等しい、といおうとする試みである。このような議論が専門の歴史家の間でなされることはあまりないであろうが、ブログでのコメント欄とかソーシャルメディア上では時々見られる。そこでは戦争犯罪に関する党路線を否定する歴史家たちがときにデイビット アービング (David Irving. ホロコースト否認のイギリスの代表的歴史家) に例えられたりしている。もちろん同様の恥ずべき言説はしばしば気候警戒論という憎悪差別観あふれる世界でもみられるものである。

ここでごく個人的な意見をのべたいが、まさにこのようなホロ発言がみられたがために、私はしぶしぶながらこうした二つの論議に加わらざるを得なかったという事情がある。慰安婦問題について、路線を支持する証拠を、また地球温暖化についての運命的見解を支持する証拠を、ともにホロコーストを支持する証拠に比べるということ自体がもつとも陰險な形のホロコースト否認である。私の父はユダヤ人家族のもとに第二次大戦前はポーランド領であったウクライナで生まれた。

ドイツ軍がナチのソビエト侵攻とともにウクライナに侵入し、父の親類は二人を除いてすべて殺害された。私はこうした出来事を父と叔父から聞いて知ったわけであるが、しかし私はホロコーストが実際に起きたと確信しているのは、話を聞いたからではない。これにはベントリーとジーグラの教科書の主張を支持するような種類のものとはまったく別の、多数の独立した証拠がある。私は自分でウクライナへ行ってみたが、そこでは私の祖父母と、父が生まれた街に住んでいたユダヤ人のほとんど全員がSSに処刑されていた。数年前には、処刑がおこなわれた場所をここだと指差し、何があったかを話してくれるウクライナ人がまだ生きていたのである。これら

は独立の証人たちであり、嘘をいったり、自分の話を美化したりする動機はまったくない人たちである。

そのような証人は東ヨーロッパ中に無数にある。さらにもっと説得力のあるものがある。そのひとつは、ドイツ国防軍の大佐であったアクセル フォン デム ブツ シェ＝ストライトルスト (Axel von dem Bussche-Streithorst,) という、23歳のザクセンの貴族で、ロシアで多くの戦闘に加わり、その勇敢さのためにドイツの最高名誉賞を受け取っている人である。1942年、ブツシェはたまたまウクライナのドブノ空港でSSがユダヤ人の大量虐殺をしている光景にぶつかった。この事件はかれの生涯に大きな傷跡を残した。その光景を目撃してからブツシェは、スタウフェンベルクのクラウス シェンク率いる軍事陰謀策に加わり、自爆によるヒットラー殺害を申し出た。その策略は、その殺害の試みがなされる前にかれがロシアとの戦いで片足を失ってしまったため、潰れてしまった。(これでかれは騎士十字の最高軍事栄誉賞を受けている)ブツシェは戦後も生き延びてデユブノでみたことを公衆に話している。[PH]

ままたもうひとつの著しい証言はポーランドの将校で、ポーランド抵抗運動のメンバーで、自発的にアウシュヴィッツの捕虜となったヴィトルド ピレツキ (Witold

Pilecki) である。かれはそこで行われているのかを見つけ出すようにと命令を出し、抵抗組織をつくるようにいった。ポーランド国民主義者であったピレツキはとくにユダヤ人に共感的ということはなかったのだが、かれの驚くべき報告にはユダヤ人の絶滅についての最初の詳しい情報が記されている。戦争終了後、戦後の共産党体制下でピレツキは逮捕され、拷問され、裁判にかけられ、司法的殺人にあった。そしてかれの報告は残ったのである。かれの報告は実に震撼させる効果をもっているが、（そしてだれでも日本の慰安所をホロコーストに比較しようなどという気持ちを持つ人にはかならず読むべきである）2000年まで知られていなかった。[WP]

・英訳はここで得られる。 [web link](#).

ホロコーストの存在を信じるという論議はこうした証言やそのほか無数の相互に独立の証言と、また物証もあり、また多くのナチ指導者たちの陳述[AR] およびナチのイデオロギーといったものを拠り所として構成されている。日本人が真に悪魔的な国民でないかぎり、ベントリーとジグラーのいうことが正しいのであれば、フォン ブツシェやピレツキに匹敵するような信用すべき証人が必ずいるはずである。しかしいるのは、自分で嘘を認めた吉田だけである。ところがひとりの独立かつ信用

すべき証人が実際にいるので、その証言について以下に少し詳しくみてみたいとおもう。多くの点でその証言は「路線」を確認するものではない。

さらに加えて、規模に関する犯罪行為がなされるときにはかならず、それを正当化し、またひとの良心を黙らせるイデオロギーが存在する。しかしそのようなイデオロギーは戦前の日本にはみつからず、ただ中国と韓国のマスメディアのグロテスクな敵の悪魔化の試みにおいてのみである。

この問題にはまた別の面があつて、「破壊的地球の温暖化」についての議論によりよい類比関係がみとめられる。私は数学が専門で、多くの数学者がそうであるように、科学、とくに物理学に興味をもっている。しかし大気物理学、つまり物理学の最も気候に関連している部分は、とくに面白いとは思わない。そこで用いられている数学が素人的だからというのがその主な理由である。それで私は最初に地球温暖化ということを目にしたときは、とくに疑う理由ももたなかった。しかし二つの事柄から、この主題に注意を払うようになった。そのひとつはやがて来るという大惨事を提議するひとたちが、最初から自分たちのモデルのもつ确实性の程度を誇張していたことである。もうひとつは、物理学あるいは統計学の

基礎をしっているひとならばだれにでも明らかである、かれらの主張の確実性が誇張されていると指摘をしたひとを攻撃する際の、激しさないしほとんど憎しみの強さである。このような事態は、政治やイデオロギーが絡まない限り、科学において決して起こらない。同じことはもちろん歴史についてもいえる。あるとき、私はこのテーマが生まれて以来の偉大な物理学者であるフリーマン・ダイソン (Freeman Dyson,) が、私がそうではないかと疑っていたことをはっきりと確認するのを聞いた。このような大惨事の予測が依拠している諸モデルは全然意味がない、というのである。

同様の指摘は多くの主だった大気物理学やまたこれに関係する分野の専門家たち、たとえばMITのリチャード・リンゼン (Richard Lindzen)、あるいはもっと最近では地球大気科学研究所元所長で、ジョージア工科大学のジュディス・カーリー ([Judith Curry](#)) などがしている。そのような言明がなされると必ずそのあとで、歴史的、個人攻撃、罵詈雑言、人格の毀損など、私が子供のころ、共産主義下で経験してよく知っているあらゆる方策が用いられる。このような攻撃が一度ならず、二酸化炭素と一酸化炭素の違いも説明できないような人たちがからくるのである。これは科学とはまったく関係ないこと

で、それは韓国の、また世界の左翼主義者たちの「慰安婦」問題をめぐる「怒り」が歴史とは何の関係もないのと同じことである。

ひとつの独立証言

すでに触れたように、ひとつの独立の、そして事柄によく通じた、また客観的な証人がおり、そしてかれの証言は「慰安婦」および太平洋戦争時代の軍の売春所にかんする主題についてのもっとも重要な資料のひとつとして考慮されるべきであることがわかった。それでいて、かれの、出版されてはいないが、タイプ原稿をゼロックスで写したものがインターネットで入手可能であるのに、この問題についてほとんど無視されてきたようである。

* 証人の名前はゴードン トマス (Gordon Thomas) で、資料はラバウル 1942-1945、日本軍の捕虜としての4年間 (*RABAUL 1942-1945 An Account Of Four Years As A Prisoner Of War Of The Japanese* [GT].) というものである。この原稿は時代遅れではないのだが、トマスが解放された直後、多分まだ1940年代にタイプ印刷されたものとおもわれる。

* これを私が書いたあとでトマスの原稿が、少しばかり訂正されて2012年に出版されたことを知った。そ

のタイトルはラバウルの捕虜たち、民間人捕虜 1942-45」 “Prisoners in Rabaul. Civilians in Captivity 1942-45”, (Australian Military History Publications, 2012. である。

3年間、日本が降伏するまでトマスは日本の民間人捕虜であった。しかし、ほとんどの戦争捕虜と違い、トマスは捕虜収容所ではなく、ニューギニアのラバウルの周辺にあった、日本軍の供給司令部のうちのひとつに寄寓していた。そのため、かれは日本人兵士とその生活について、門外漢ではあるが、内側から眺めることができるという、極めて特異な機会をえたのである。二人の技師とひとりの肉屋と一緒にトマスは便利屋かつ調理師として、氷のほかに生肉などの腐りやすい食品を保存し、配給する地方製氷センターで、働いていた。ニューギニアの気候からして冷蔵庫、冷凍庫は明らかに重要であり、その冷凍庫がいわばラバウルの社交場ともなっており、いろいろな階級の兵士たちが「氷水」ともらいに集まり、ときにはビールや酒をもってきて夜の宴会すらやることもあるのだった。冷凍庫には「無用のもの出入り禁止」「外国人と話すこと無用、かれらはスパイなり」という張り紙がついていたにもかかわらず。実際には日本兵はこうした張り紙はいつも無視してしばしば捕虜たちにタバコとかキャンデーのプレゼントをもってきて、自分

たちの家族や農場のことからイギリス文学にいたるさまざまなかたちをしゃべるのが常で、文学の話などはより高い教育を受けた者、たいていは将校たちがするのだった。

戦争前はトマスはジャーナリストで、雑誌の編集もしており、かれの回顧録からは生来のすぐれた文章力と鋭い観察眼がしのばれる。またそこには今日では「人種的偏見」とよばれるものも多々見えるが、当時としては一般的に単に世間知と考えられていたものである。最初から、それは日本人がラバウル島を占拠してすぐ、トマスはそこで自発的に生まれた社会秩序について語っている。「ヨーロッパ人はよく調べてホールの北側を占めていた。アジア人たちはその反対側にいた。現地人の少数のかたまりがあちこちにしゃがんで、至高の白人たちが従来の万事についてのリーダーであり主人である役割を剥奪されている状況をなんとか理解しようと努めていた。これは、われわれがやっと気づき始めた、すべての形が逆転しているという状況を示すひとつの側面であった。この町の指導的な市民の何人かが有色人種によってひとまとめにされ、権威を完全に引き剥がされていたのだ。」

かれはまた [今や勝利に酔った監視役はこれまでずっと白人種を憎むように何度も訓練されてきたのだから、かれらには人種的な憎悪があるのも無理はないと、自覚している。その白人たちからかれらは西欧の知識と進歩的な思想を学んだのではあるが。

かれは「ジャップ（日本人）の一般的な精神構造を親しく知ろう」と決めた。かれの普通の兵士についての評価は決して好意的ではない。普通の階級の兵士たちはきまって、単純な男たちである。子供っぽい見栄をはり、権力を楽しみ、ちよつとでも褒められると敏感に反応し、とくに白人から褒められるのが嬉しい。そして、軍の規律と西洋の組織の模倣という薄い表面のすぐ下にはかれのもともとの野蛮さがある。ちょうど小さなことがはえの足をひっぱったり、マツチでねこのひげの先を焦がしたりする類のことである。

トマスが目からみると、将校たちは全然違っていた。かれらはたいていは大学を卒業しており、西欧の思想や文学についておどろくほどの知識をもっていた。トマスはかれらとシェクスピアやミルトン、ジョンステュアート、ミル、H. G. ウェルズ、トルストイ、トーマス マン、サマセット モーム、そしてもっと新しい（1942年時点での）現代作家のことも話した。その多くは

ヨーロッパ語を一カ国語以上話せたし、トマスは、東洋の精神は西洋の観念を理解できないという信念にもかかわらず、しばしば感心させられた。実際トマスは冷凍所をたずねてきた高級将校がいつも陽気で、気がよくて、「決して人種的な反感を示さなかった」といつている。(57 ページ).

にもかかわらず、トマスの《ジャツプ》にたいする全般的な見解はまったく共感から程遠いものである。しかしながらかれは日本人を敵に廻さないように、できるだけ観察することが賢いやりかただと考えた。「捕虜となつては、わざわざかれらを敵に回すのはおろかである。捕虜が意識的に敵対するのはばかであり、目的達成のためには、砂糖をつかうほうが酢を使うより容易である。その点でジャツプと蠅との間には決定的な類似関係がある。両方とも害虫で、害虫はコントロールしなければ一もしてできるなら。」

日本人兵士と非常に親しくしていたのだから、トマスがかれらの定期的なお相手である慰安婦とも知り合いになっただろうと予想するのは当然である。かれは慰安婦たちを定期的に、またごく近くからみかけた。彼女たちは冷凍庫を兵士に連れられて、また一人でもやってきており、かれはこの話題について回想録のかなりの紙面を

割いている。トマスの日本人にたいする批判的な態度からして（つまり日本人全般としては、ということで、個人については相当多くの日本人について好意をもって書いている）、かれが日本軍について宣伝するようなことをいうとは期待しないであろう。それでもかれの回顧録を読み終わって、私は学者の歴史家が、すくなくとも英語圏では、日本人についてこれほど公平に、しかも勇気をもって詳しく、偏見ぬきの説明をするものがあるかどうか、疑問であると感じたのである。もしかしたらむしろそのために、「慰安婦」問題の議論でなにもこの重要な資料について言及されないのかもしれない、と。実は、私が途中半分以上、よんだときに、たまたまトマスの著書によっている論文がアジア太平洋雑誌（[The Asia Pacific Journal: Japan Focus \[HN\]](#)）に出ているのに気付いた。私はこれに関心を抱いたが、それというのもこの雑誌のこの欄が慰安婦問題についての「党路線」の牙城であることを知っていたからである。トマスの著書がこの大義にどう貢献することになるのだろうかという、やや皮肉な思いもあった。その論文はオーストラリアの歴史家の故ハंक ネルソン（Hank Nelson. 2012年に亡くなっている）で、かれはニューギニアパプア島の日本占領についての専門家で、多少違う事柄に関連してその名前は以前出会ったことがあった。 19

42年の6月22日、アメリカの潜水艦*USS Sturgeon*が日本の商船モンテビデオ丸を撃沈したのだが、その船には日本へ輸送される途中だった1000人のオーストラリア人が乗っていた。その多くはゴードン トマスの友人で、回顧録の前のほうで、その沈没のことがやや長く論じられている。この事件についてオーストラリアテレビで議論がなされたことがあり、そこにネルソン教授も加わっていた。[\[MS\]](#).船上のだれかが生存したかどうかという問題について、ネルソン教授はつぎのように述べている。

私はオーストラリア人のほとんどがモンテビデオ丸とともに沈んでしまったとおもいます。波間に浮かんでいた数人がいたでしょうが、残念なことにかれらは去っていく日本人乗務員によって見捨てられたのだとおもいます。まわりにアメリカの潜水艦がいるとわかっていながら日本の駆逐艦がわざわざ航海を中止して静止し、捕虜をすくい上げたとはまず考えられません。

ところが、実にこのまず考えられないことがおこっていたのです。もっともそれは恐らくこの時この場所ではなく、2ヶ月ほど前のインドネシア沖（スラバヤ）で、日本の駆逐艦雷号艦長、海軍中佐工藤俊作が沈没した何

隻かの米英駆逐艦から442人の米英の生存者の救助命令をだしたのである。この地域にはアメリカ潜水艦がいると信じられており危険であつたにもかかわらず、である。救助された水夫たちは日本人によって極めて模範的な待遇を受けた。この救助の事実は1996年（工藤の死後）まで知られておらず、それは救助されたイギリス人水夫 サム フォールSam Falle,が自叙伝のなかでこのことに触れたからである。[\[SF\]](#). このことは西欧の歴史家たちが日本人を過少評価することもあるのだ、ということを示している。

実はすくなくとももう一冊、トマスとその回顧録について論じたオーストラリアの歴史家による著書がある。[\[CT\]](#), ただ慰安婦の問題については、ごく軽く触れているだけなのであるが、しかしそのやり方が興味深いのでのちに触れることにする。

ネルソンの論文の紹介文はGMcC という署名をしているひとが書いているのだが、それはほとんど滑稽なほど典型的な「気象の科学」的な例である。そこにはこの論文は日本の安倍首相批判者の主張を擁護しこれを証拠立てるものだと述べているが、もしこの序文がなにかの役に立っているとすれば、まさに逆に批判者たちの立場を

崩しているのである。さらに続けてオーストラリアは韓国と中国、US, カナダと共に日本を断罪すべきであると要求している。このことがちょうど安倍政府がアメリカ合衆国の支持を得て、インド、オーストラリア、ベトナム、フィリピン、等のアジア諸国と連合して、中国の権力の増大と、ますます露骨になる脅しをなんとか押さえ込もうとしている時期に当たっていることは、もちろん純粋な偶然の符合なのであろう。

ネルソン論文そのものはまた別である。これは極めて情報が多く、トマスの本および別の資料から得られた事実の多くに言及しており、そこには「路線」には相当な打撃となるものも含まれている。しかし、かれの説明にはどうやら意識的とおもわれる省略もあり、ほとんど笑止な歪曲もある。

1. 慰安婦の数について

この本のはじめの部分で、まだ「冷凍センター」に雇われていなかったときにトマスは200人ほどの韓国女性を乗せてきた船が到着したのを目撃している。のちにかれはラバウルの慰安婦は約3000人と見積もっている

が、かれが見たのは200人が一艘の船で着いたことであり、のちにもっと何隻か人を積んだ船が着いたと言っている。

ネルソンが指摘しているように、通常かなり信頼の置ける米国戦略爆撃調査団は500人から600人という数字を挙げている。しかしネルソンは2000人という数字におちついているようである。

「ラバウルで起こったとみられることは、おそらく2000人あるいはそれ以上の女性が騙され、無理やり極めて条件の厳しい売春活動に引き込まれたらしい。彼女たちは昼も夜も男たちの要求に答えていた。」と書いている。

女性たちがみな騙され」という主張の根拠はきわめて薄弱で、実際にはネルソン自身もそれに反したことを述べている。次の節でもう一度これについて考えてみたい。

トマスがこの数字に行き着いたのはどのような経過によるものであろうか？ ラバウルにいた日本軍はわずか10万人である。女性たちはいくつかの売春所に配当され

た。それぞれ異なった地域が陸軍、海軍、空軍にわけられ、それぞれの警官によって警備されていた。

トマスによると、各兵士は2週間に一度売春所を訪ねる許可があたえられていた。おそらくそれは異なった日には異なった売春所を訪ねることができた（そうでなければ売春婦の数はもっと少なかったはずであるから）が、同じところへ帰ってくるのはまるまる2週間待たなければならなかった、ということの意味しているのだろう。

この解釈は正しくないかもしれない。しかしもしそうではないとすると、つまり、兵士がひとりの慰安婦と二週間に一度しか性交できなかつたとすると、ラバウルの慰安婦は600という米国戦略爆撃調査団の計算よりもっと少なかったことになる。トマスはひとりの女性が25人から35人を相手にしていたという情報を信頼すべき筋から得たとのべている。（この数字をマギー マクネイルがあげている、ホノルル売春所の日100人という数と比べてみたい。）。約3000人という数はなにかしらの調査で兵士（10,000人）を一日の平均顧客数で割って出てきたものらしい。ほとんどの兵士が毎日性交をしたと仮定しても、これは大げさで、トマス自身がいつているように、兵士がみな売春所を利用していたわけではない（トマスは捕虜とホモの日本人将校との奇

妙な関係を語っている)し、兵士にたいする一般的な罰則は売春の許可を取り上げることであった。おそらくそのような考慮からネルソンは2000人という数字に落ち着いたのであろうが、これはあくまで推量であって、実際の数はUSSBSの数字に近かったかもしれない。

トマスはまた女性たちの中には闇市を経営して、たとえば酒のような贅沢品で支払いをする客を余計に得ていたものもあったと述べている。(このことはネルソンも繰り返しのべている。)トマスはまた二箇所の売春所に属する女性が叫び声をあげ、髪の毛をひっぱり、木の下駄でぶったりして、激しい争いをするることがあり、憲兵隊がやってきて、喧嘩しているものに冷水をかけてやめさせるまで続いた、という。このことはネルソンがのべているのだが、なぜか、この争いが、トマスのいうところでは「96番の売春所の顧客のひとりが94番の女性たちの魅力を品定めをするように招かれた」という、あきらかに売春の礼儀に反する行為」が原因だったということは無視されている。94番、96番というのは二つの競争相手の売春所のことである。

こうしてみると女性のなかには一日に30人を相手にしてもまだ余裕があったのだらうという印象を受ける。いづれにせよネルソンの10万の兵士に平均2000人の

慰安婦という数字をみとめるとしても、それは戦場の日本軍二百万以下に最大で4万人ということになる。しかし、中国の日本軍の物流（ロジステック）はラバウルにくらべてずっと劣っていたのだから、妥当な数字はずっと少なく、秦氏の2万という推定に近いものであろう。

C. サラ ソウは、推定数が2万（秦氏）から40万（中国の主張）まで、非常に広い範囲にひろがっていることをのべており、それから社会学の専門用語と「フェミニズムの学識」を用いて、こうした推定者はすべて政治的、国家主義的偏見に駆られており、あるいは「各人の社会的歴史的位置に由来し、研究者の性別、階級、人種、国民性を反映している」と結論づけている。科学者あるいは戦史家なら別の要因、たとえば人間の生理的な限界や可能性を制限するロジステックに言及するだろうが、そのような事柄はフェミニストの学者の関心領域外であることはあきらかである。

ソウ教授は倫理的な見地からはごく少数であってもこれは「多数」であると指摘するが、それはもちろんそのとおりであるが、しかし要点を逸れている。最大の論議が集まっている問題は倫理的な責任問題ではなく、政治的問題である。戦争とはほとんど定義上、倫理の否定を含

んでおり、戦争の法は、戦争が起こっている場所での戦争行為に適用される。戦争の非倫理性が問題なのではない。政治というものは、左翼のユートピアを除いては、しばしばより少ない悪を選ぶことであり、いかなる法的政治的判断もこのことを考慮に入れてなされなければならない。二つの悪の間の選択にかんしてのよい例はスマラン島でのオランダ人女性の多数が提供している。彼女たちは収容キャンプに残るよりは売春婦として働くことを選んだのである。あきらかに彼女たちには二つの悪のうちどちらかの選択しかなく、それでも戦争という条件下では、彼女たちの選択は自由意志によるものとオランダの法廷で判断されたが、これは正当である。オランダの法廷でこの特殊なケースに適用された判断はより広い意味でも適用されるべきである。

2. 日本人慰安婦

ゴードン トマスは ラバウルに日本人慰安婦がいたことに言及しており、ネルソンもこれを確認するとともにより詳しい情報を付け加えている、

すでに述べたように、日本人慰安婦が存在したということは、「路線」を支持する人々にとっては面倒な問題である。謝罪がをすべきではないのか、ましてや彼女たちにも賠償金が払われるべきではないのか、なされるべきではないか、慰安所を設立したことが日本軍の「犯罪」であるとみなされることになるとしても、それがどうして韓国と中国という特定な国への犯罪ということになるのか？

(さらに、将校を含む韓国人と台湾人の兵士たちがともに日本軍のなかにおり、かれらも慰安所への入所許可をもっていた、ということがこの複雑さをまた一段増している。)

しかしながら、ネルソンはもうひとつの種類の犯罪、すなわち「人種差別」についても、明らかにしている。かれは海軍の慰安所の価格表を公表しており、そこでは顧客は韓国人と日本人の間で選択するようになっていた。日本軍の二等兵の給料は

は日本人女性は30分で2円50銭、韓国人は2円であつたが一夜をともにした場合はともに10円である。日本軍の少尉の1日の給料は2円50銭以下であつたから、これは決して安い価格ではない。

ネルソンのコメントをここに引用しておきたい。「人種差別とはつまりは韓国人女性が日本人女性より安いことであるが、一人の女性と一夜をともにする将校たちにはあてはまらないことになる。」と。

「人種差別」か、あるいは、需給の関係か？ 日本と韓国の生活費の違いはよく知られており、それが売春の価格にも対応しているのだろうが、私はむしろ差が少ないのに驚いた。

また、まるまる3年間をカバーするこの本の全体において、トマスが言及している唯一の人種差別というのは、「日本人」と「白人」の間だけであることも注目に値しよう。その例のひとつはごく初めの方で、日本人が捕虜の所有物を「検査」しているときに、白人捕虜は日の当たるところに立たされ、アジア人たちは日陰で休めた、という例がある。また次のような一節もある。

「ジャップはきまって、その土地の住民であれ、上海からの戦争捕虜にせよ、中国人にはずっとよい待遇をした。」

かれはこれは両国がともに漢字を用いるということからくる絆のせいだとしている。興味深い例は（24ページ）

「いまや売春所はきちんと整理されていて、毎朝何百人という水夫と兵士が「一張羅（ナンバーワン）（かれらは自分たちのパレード用の制服をわれわれの前ではそう呼んでいた）」を着て、整列した群衆の前を列をなして歩いて行って、まるで、ピクニックへゆく小学生のように笑ったりおしゃべりしたりしていた。その多くがこの冷凍センターの裏の戸口で氷水を欲しがるときには2、3本のタバコでその支払いをし、時には一杯の氷水のお礼に一箱くれたこともあった。わざわざ自分たちが何処へゆくのかを説明するもつとしゃべりなのもいた。かれらはこれから（「パンパンや“Pampaia”（売春宿）」へいくのさ。 というのだった。

そういつて、いたずらっこが悪さをするときのよう
なずるい笑をうかべ、頭を売春所のほうへ動か
してうなずいてみせるのだった。ジャパン マ
リー ナンバー ワン（日本人の女は最高）とい

うのがかれらが自国の女性の質の高さを自慢するのにつかう、気に入りの文句だった。そしてそのあとでは必ず、こんどは豪州の「マリー」たちの魅力について、次から次へと質問するのだった。オーストラリアの女性に関連してただマリーという一語を言われるだけですぐにわれわれはいらいらしたものである。そしてわれわれは嫌悪で顔をそむけ、向こうむいたが、それをまた面白がって、小さなニツプ（日本人）が、大きな下品な笑い声をあげた。かれらはわれわれが自分たちの国の女性を韓国の売春婦や、日本人の妻とですら、比べられるのには我慢できないとは、わからなかったのである。」

もしここに「人種偏見」を見出そうとしても、どう考えてもこの日本人兵士たちの態度には見当たらない。

3. 徴集

慰安婦問題でもっとも論議が激しい点のひとつは彼女たちがどのようにして募集、徴用されたかということである。「路線」版では、「売春婦」という言葉が入る余地はない。どうやら、（今日とはちがって！）当時アジアにはまったく売春婦はいなかったのか、あるいは少なくとも

も韓国の売春婦は日本軍のために働くにはあまりに愛国的で、（何千という韓国人兵士が日本軍に自発的に加わったにもかかわらず！）あつたらしい。その給料は当時の韓国の有名大学の卒業生の給料を優にこしていたにもかかわらず。

この本の初めのほうで、トマスはある韓国人労働者が「多少腹を立てた様子で」女たちは工場で働き、カカオやコーヒーの栽培にかかわる筈だったのに、と自分にいった、と書いている。彼女たちはこちらに到着してからはじめて、自分たちが本当はなんのために雇われたか知った、というのである。

ネルソンもテューメイ Twomey [CT] も、200人の慰安婦が到着したのをトマスも他のオーストラリア人捕虜も目撃した（かれらは日本人の番兵から彼女たちの荷物を運ばされた）としているが、ネルソンは「多少腹を立て」ていた、ひとりの韓国人労働者が、自分に彼女たちが騙されていたことを自分にいった、というトマスの発言を忠実に記録しているが、（「多少腹を立てて」、とネルソンが書き加えてはいるが）、テューメイの話では、ひとりの労働者というのが、韓国人労働者たち、と変わっており、その労働者たちが「オーストラリア人捕虜たち」に、女たちが虚偽の口実で、到着したのだ、と

いったことになっている。実のところ、トマスはたしかに女性たちが売春するようにはめられた、とおもっていたが、後になって、これは確かではないかもしれない、と思い直し、もし韓国を離れずにいたら彼女たちは結局、同じ仕事をもっと悪い条件でせざるを得なかっただろう、と論じている。かれのこうした言葉はネルソンもテューメイも無視しているが、ただ、テューメイの場合はすでに述べたように、この問題はかれの関心ではない。

この騙されたというのが（トマスがいうように）ひとりの韓国人からきた情報なのか、あるいは多数の韓国人からなのか、ということはそれとしてどうでもいいことではない。ひとりの韓国人はせいぜい数人の慰安婦と話してこの情報を得たのであろうから。かれらはそれぞれ異なった国から、異なった船で、異なった時に到着したわけであるから、（トマスは韓国人と日本人の慰安婦に言及しているが、ラバウルには台湾人の連隊も台湾人の女性もいた）ひとりの労働者の証言が慰安婦の全員あるいは大多数に当てはまったとはいえないだろう。実際ネルソンは女性のうちのいくらかは「[売春を長期にやってきて] こりかたまってしまった、売春婦たち」のようであり、おそらくはラバウルで「自分の意思で」働いてい

たのだけれど、それは少数派である、と言明している。この言明はかれの記事のなかにほかにもみられるが、とくになんの証拠もなく決めつけられている。おそらくは、両方の種類の慰安婦たちが存在したのであろうが、その相対的な割合を判断する根拠となる証拠が全くないので、ネルソンが、自発的慰安婦が少数派だったと断言する自信はどこからきたのかをみることは困難である。（もちろんそれでも、このような仕事をお金のためにするような女性がいるなどとはまったく想像もつかない、という路線からはすでに遠く隔たっている。）さらに、ひとりの従軍衛生師松本栄好氏が中国の慰安施設で働いており、「党の路線」支持者が気に入っている慰安婦証言者であるが、かれはかれが診た「慰安婦」はすべてそれ以前も売春婦であった、とのべているのが録音されている。[web link](#) [HK].

吉田清治氏の著作は歴史家たちには影響がないと繰り返し主張されているのにネルソンが吉田の虚偽の本を文献に入れているのに、かれを自分の本文でも引用して売春が強要されたことの証拠としているのは、注目に値する。こうなると、吉田証言がネルソンにとって、自発的に慰安婦となったものは少数だったと明言するために

「どうしても必要な証拠」だったのではないか、とう違われるのである。

もちろんこうしたことが不確実だったからといって、それで日本軍がこの件について無罪だったと言えるわけでは到底ない。もし女性が騙されたのであれば、帰国するか、あるいは約束通りコーヒー栽培園で働くかの選択の自由を与えられて当然である。しかし、いわゆる「慰安婦」とコーヒー栽培の仕事との給料の大きな違い、もし女多hcいが韓国に居続けたとしたら、結局はもっと悪い条件で売春宿につとめることになっただろうという、ゴートントマスの個人的な知識による信念など勘案すると、からして、そのような選択をしたかどうかは怪しいものである。実はトマスのただの想像は（かれは韓国の売春の条件についてはなにも知らなかったはずである）多くの証拠でそうだったという証拠があがっている。[\[CSS\]](#). 売春宿の主のほうが、軍におけるよりもずっと多く売春婦に暴力を振るっていた証拠が多数ある。軍は彼女たちに共感的だったとしばしば書かれている。

4. 待遇

今ではニューヨークタイムズですら、拉致や強制徴用を
実証できないことを認めているので、[\[NYT\]](#) こんどは

女性たちがどのような待遇をうけ、彼女たちが「性奴隷」だったかどうかという点に注意がむけられている。ジグラーの教科書がもっとも許しがたい主張をしているのはこの点に関してであり、またトマスの証言が「党の路線」支持者にとっては破壊的なのはこの点に関して、である。派手な着物姿で、髪の毛をいろいろにセットして、クスクス笑う少女たちが一団となって船で到着し、その荷物を運ばされてから、彼女たちが、群衆の賑やかな声をあとにまた出発するまで、ほぼ3年間トマスはこの種の女性たちを身近にみていた。に年間は粉の女たちの特徴でもっとも著しいのはみな快活なことで、それトマスは一度ならずコメントしている。ジグラーの教科書にあるような種類の虐待らしいものはなにもない。唯一、彼女らにかかわる暴力事件は、すでにのべた、競合する売春所が顧客の取り合いでおこした喧嘩である。彼女たちは「性奴隷」だったのだろうか？ もちろんそれは「奴隷」とはなにを意味するかにより、通常の民間の売春が奴隷とみなされるかどうか、による。[\[CSS\]](#)で、ひとりのアメリカ人日本法研究者ラムゼイヤー（J. Mark Ramseyer）は日本の売春制度が「奴隷」かどうかについて、公娼となった農家の女性は「それ以上魅力のある選択肢がなかった」し、「売春の収入は高かった」ことなどを指摘し、奴隷ではなかったと論

じている。通常売春婦たちは6年間の契約に署名し、期間の終わりに相当な貯金をもって帰ってゆくのであった。

「党路線」支持者が繰り返す、「慰安婦」は給料を支払われなかったかもしれないという主張は、トマスの話で完全に覆されているし、それにそもそももしお金が関わっていないのに、どうして彼女たちが客をとりあつて争うだろうか？ いずれにせよ、トマスはこの点に関してはまったく疑いをもっていない。

かわいそうに、この「大きなの楽しみをくれる小さなひとたち」に運命は酷なものだった。ほぼ二年間も、せっせと欲望を満たしつつ、韓国の我が家の家賃を払えるお金を貯めたのに、ラバウルを出てほんの丸一日後、帰りの便の船が爆破されて、ほんの5、6人だけがなんとか逃れて「語り部」となったのである。

この重要な一節をネルソンでは引用していない。だがこの短い文章には「慰安婦」についての議論に関連した重要な事柄がら多く含まれている。そのひとつはトマスが彼女たちが帰路にあつて、かなりの貯金をもっていたことである。実際すでに日本の敗戦が明らかになっており、ラバウルへの空爆がますますひどくなっていた19

43年の終わり頃にはすべての慰安婦たちが疎開させられていた。もし日本人が彼女たちをただの軍の性奴隷だと考えていたのなら、連隊は残留しているのに、わざわざそんなことをするだろうか？ トマスは女たちがラバウルを去ってゆく様子を述べている。「拍手喝采のなかを、持ち物のベッドやスーツケースの上に腰をかけて手を振りつつ、通りを練っていった。暗いねずみ色と緑色の景色とユニフォームをきた人間たちとのなかで、それが街に残っていた賑やかな色合いの最後だった。」と。戦争捕虜たちにも見えるところで、おっぴらに女たちに喝采するというのは、「実施の事実を隠蔽するために」彼女たちを殺害したというのからまるで「遙かか離れた呼び声」である。たしかに彼女たちのほとんどが生き延びられなかったが、その理由は彼女たちを乗せて帰路にあった船が連合国の飛行機が撃沈したからである。この悲しい事実はこの問題についての記述や議論のなかではほとんど言及されていない。しばしば、とくに吉見氏によって、女たちが自分の好まない兵士との性交を拒否できなかつたから「奴隷」なのだという主張がなされる。彼女たちはもし兵士が、ネルソンの記事にあげられている幾つかのルールを守っていなければ、かれを拒否することができたのである。もしその兵士が規則を守っていたのであれば、彼女たちは、どの民間売春宿でもそうせ

ざるを得ないように、かれに奉仕しなければならなかった。しかし、トマスも指摘しているように、そういうなら兵士の側にも選択の自由はなかった。かれらにとっての女性は、それぞれ順番をつけられた売春所の順番を振られたひとりなのである。両側にとって、これはビジネス取引であった。

女たちはまた移動の自由ももっていたようである。彼女たちは男ぬきに冷凍センターにやってきて、しまいにはオーストラリア人にうるさがれている。ネルソンはふたつの説を引用しているが、重要な部分を削除し、さらに驚くべき手腕を発揮して、それをトマスがまったくしていない、「残酷さ」と「虐待」を示す例として用いている。ここにそのふたつの説の全文を紹介し、ネルソンが引用している箇所をゴチツクで示そう。

はじめの物珍しさが失せるとわれわれはこの小さな婦人たちが嫌でしようがなくなった。彼女たちはときとするとこの場所で我が物顔に振る舞い、私の料理器具や食器類を勝手に使って、私の電気ストーブで自分たちの奇妙キテレツなしろものをこしらえ、その間何時間も日本のぎしぎし擦れ音をたてるレコードを蓄音機でかけ続けたり、ときにはわれわれのベッドへいって横になってあれがほしい、これが

いる、と要求したりするのだった。「やぎさん、お水を頂戴、アイスウォーターよ、早く！」と、ある晩私によびかけた。私は彼女にはいらいらした。彼女はもう半時間も料理していたし、それに全然かわいくない田舎娘で、多分どこか韓国の片田舎の出て、油で育てられ足首が太くて、それに特別にばかだった。だから当然のこと、私は氷水の要求は無視した。

多少腹を立てた様子で彼女はまた言いつけた。私はコップを指差して、「氷水なら自分でとれば」といった。

だが彼女はそういうやりかたでは望まなかった。かつて支配的だった白人が自分にサービスしてほしいのだった。私はそれに気づいた。またもや彼女は言いつけた。トツスルはヌードの女をスケッチしながら、ペタルを膝に抱いていたので、テイツイーと私との間におきていた小さいいさかいに気づかなかった。

「ノー、あなたよ、早くして、」とテイゼリは命令した。

"ばか ー!"と私は怒って喚いた。これはジャツプがよく使う罵り言葉で、訳せば「愚か」とか「愚か者」という意味だが声の調子で強さがきまり、私は最高級の強度で、おもいつきりどなりつけた。

われわれはしばらく互いに吠えあっていたが、おたがい相手の意味はわかっていなかったが、まあ、それはそのほうがよかったかもしれない。何しろ私は戦争捕虜なのだから。すると絶望と怒りでテイゼリはトツスルに助けをもとめた。それで私はすぐに私の負けだ、あいつは彼女の味方をする、気付いて、すぐ裏口から夜の外に出て、空箱に座ってテイツイーの喉の渇きがおさまる頃合いを待った。

かわいそうなあのテイツイー、きっとあの娘は知能遅れで、その道のプロフェッショナルではあるが、ラバウルの売春婦たちのうちで彼女だけがー たしかそう噂に訊いたのだがー、赤ん坊を産んでしまっ、もちろん生まれてすぐその子は死んでしまったんだそうだ。

もうひとつの逸話は日本人女性にかかわるものである。

夕方の英語レッスンはかならずとっていいほどテイツイーとペタルがやってきて、あるいは中華街にある売春宿の女教師がやってきて中断された。彼女たちは少しばかりの氷をもとめてくるのだった。実際彼女たちがあまりしばしばくるので、氷水や氷を彼女たちには与えないようにととくに注意されていた。配給中央局はわれわれが彼女たちの魅力に抵抗できず、弱い立場にあつて、ひと包みの魚とか牛肉の一切れとか冷凍庫から取り出してお土産にしてしまうのではないかとおもったのである。「ところでひとりよくやってくる年取ってしなびたニツプがいたが、彼女はたいてい昼間やってきた。彼女は料理人か、いくつかの売春所の世話人で、まるで小さな猿のように世の中をのぞきまわるのだった。ある日マックが彼女のことをよくよく眺めてからこちらを向いて笑ってこういった。

「うーん、あれはなるほど料理人だ」

「え、なんといわれましたかね？」～私は自分の天職をばかにされたことに気づつたことをあらわにして言った。まあいいさ、マック、あれは君の抑圧された性が表に出てきた結果だね。彼女が毎日ま

すますノルマ シェアラーのような美人になってゆくのをよくわかっているね。

ネルソンはこれ全体にこんなコメントをつけている。

その女性のことを悪くいうのに、トマスは当時日本兵が使っていた言葉を覚えて使っている。かれが、。。そしてほかの元捕虜たちも。。は自分たちの取り扱いにたいする怒りと自分が目撃した他の捕虜になされている残酷さを反射していたのである。それにかれらは公に、あるいは自分の妻やガールフレンドに、自分たちが慰安婦を魅力的だと感じたことを言うわけがない。、と。

この一節をどう読めばいいのかはなかなか難しい。明らかにトマスもマックも典型的な、（トマスがいう）男同志のいやみな冗談の言い合いをしており、それは今日の西欧の公の談話基準からすればたしかに「政治的に正しくない」ものである。しかし私からみると、これはべつにオーストラリア人に限ったことではなく、また今日でもプライベートには普通にやっていることだと、まず確信している。ネルソン教授にとっては、いかなる女性も、他の意図なしに、醜いとか「猿」に例えられるなど

ということは考えられないのであろう。しかし実はトマスはその日本人兵をも猿に例えたことはないし、かれらが醜いといったこともない、もつともかれらの身長が低いことを（かれは「カンペイタイ（憲兵隊）の中佐で、捕虜の間ではジェフリーとあだ名をつけられていたひとりが、日本人としてはとくに背が高かった」ことを特記している。事実日本人の軍医で「フォントルロイ卿」というあだ名の将校が、トマスにいわせれば、どの基準からしても美男子だったという。

したがって日本人は慰安婦についてトマスが実際に目撃したことがない「残酷さ」について責任があるのみならず、オーストラリア的なユーモア感覚についても責任があることになる！。「自分たち自身への待遇にたいする怒り」については、私のような、第二次世界大戦が、主として東ヨーロッパの占領を意味するような人間のみならず、トマス自身にとっても、自分と冷凍センターで働いていた三人の仲間がうけた待遇は決して悪くないと感じられており、むしろ上に引用した最初の一節にあるように、主な関心事は本来の立場を失ったことであり、戦前は文句なく「勝ち犬」で支配者だったのに、今は韓国人慰安婦より下になってしまったという零落の思いである。しかしそれを別にすればトマス自身、捕虜時代は比

較的快適であったといっており、かれが指摘しているとおりに、唯一体罰を受けたのは一回顔をぴしゃりと打たれたことで、それは3年間でただ一回だった。かれはそれは自分が運が良かった（捕虜収容所ではもっと乱暴にふるまわれた）ことと、かれ自身が日本人とその「心性のありよう」を注意深く観察して、それに沿って行動するようにし、それが基本的に正しかったからといっている。ここは日本人の戦争捕虜にたいする方針ないし方針のなさを一般的に議論する場ではないが、トマスの本は他の多くの場所でも認められることを確認している。要するに、一般的な方針とかいうよりも、個人的な人間関係によることがずっと多い、ということである。トマスがいろいろな場合に観察しているように、日本人の兵士はオーストラリア兵に比べ、あまり規則に忠実でなく、ともかく彼らを苛立たせないようにすることが良い待遇を引き出す秘訣なのである。もう一つ、トマスが観察したことは、より教育のあるものについての方が、とくに高い地位の将校についての方が、ずっと良い扱いを引き出しやすい、ということである。

ネルソンはトマスが目撃した「他の人たちが受けたが残酷さ」に言及し、二人の魅力のない慰安婦たちについて「非難めいた、軽蔑の言葉を発することで「その鬱憤を

晴らしていた」とするのは、歴史家の名に値しない操作であるようにおもわれる。なぜならそれはもとの資料にあたることはまずないであろう読者に、あたかもトマスが日本兵が慰安婦に課した残酷さを課したところを目撃したかのような示唆をするからである。そんなことはまったく真実から程遠い。実に、トマスは慰安婦たちに残酷な仕打ちがなされたのを見たことがないのみならず、今日われわれがユーチューブでおきまりの種類の残酷を見たことはまったくないのである。たしかにかれはそのような噂のことを言及しており、もしかしたらそうした話は、憲兵隊が捕虜を恐れさせ、自分らのいうことに従うようにと捏造したのかもしれないと疑義をはさんですらいる。かれはまた現地人が日本の軍の規則を犯したとして処刑されたということと言及しており、また連合側のパイロットの処刑、また日本兵に課されたさまざまな重さの罰についてもふれているが、慰安婦に関するものは皆無である。

一般的には日本人に対して否定的な見解を持っていたトマスであるが、日本人個人については驚くほど多数の友好的な行為や親切さを記録している。しかし、本全体をとおしてたった一箇所かれが日本軍についてほとんど褒めちぎっているのは、かれの慰安婦と慰安婦制について

の最後のコメントである。おそらくネルソンはこのコメントを引用するのはどうしても困るとおもったのであろう。かれは全部省略してただ「私としてはそれ（＝慰安婦と慰安婦制）がこの田舎のアジア人女性たちが侵害者によっていじめられなかった理由の一つだとおもう」という短い文だけを引用している。ネルソンはこれを反駁しようと、ニューギニアの別の部分に駐留した日本軍連隊は、そこに慰安婦がいなかったが「ひどい性的犯罪はなかった」といつている。しかしかれはトマスがしているもっと詳しい議論を引用していない。それをここに紹介する価値があるだろう。

5. 戦争犯罪か必要悪か、その両方か

トマスはこの著作のはじめの部分で、かれがまだ冷凍センターでの仕事を得ておらず、ラバウルにまだ慰安婦たちが到着していなかった時に、かれは日本兵が若い中国人女性を強姦しようとしたのを目撃し、それを特有の皮肉をこめて報告している。

楽屋裏は小さな寝部屋になっており、そこに、これらの数人の若い（そしてすぐれた容姿の）中国人女性のひとりが安全のために入れられていた。扉は内側から鍵がかかっていた。だがジャッ

プの騎兵は鍵作りの仕事を笑ってカラバイン銃の元口の方を使えば、向こう側に横たわっているいい女との間の障壁を破るのに適切な武器になるといった。監視人たち数人も実は同じことを考えていた。そして真夜中ごろ、彼らは考えを実行に移した。少女たちのうちの兄が通訳に選ばれていたが、かれはその話を聞いて、すぐさま将校のところへとんでいった。その間に監視員たちは障壁を破壊する作業をしていたが、同時に娘に扉を開けるように説得する試みも続けていた。しかし少女は、かれらの意図についてかなり包括的な理解をしており、日本の誇るべき共栄計画のメンバーではなかったので、すぐに血も凍るような叫び声とわめき声をあげはじめ、それが少なからず監視員たちの熱意に水をさすことになった。将校はその兄とともにその現場に到着し、監視員たちは当然至極、文字通り打ち倒され、そして美德は再びみづからの褒賞を得て、300人の素晴らしく幸せな捕虜たちはまたセメント製ベッドにぬくぬくと潜り込むことをゆるされたのだった。

トマスはのちになって日本人司令部が「連隊は土地の女性に干渉することを禁ずる、これに反した場合は死刑に処す」という命令を出し、その結果以後は女性へん攻撃はずっと減った、と付け加えている。この一節は慰安婦に関わるものではなく、またネルソンがラバウルの外では、つまり日本軍の連隊の駐屯地が少いところでは、「ひどい性的犯罪」はなかったといっている点の説明になるものであろう。

しかしながら、トマスは慰安婦について最後にこうコメントしているのである。

連隊の福祉のための組織としてそれは基本的必要であり、もし島々でも同じようなサービス提供があったらトラブルはずっと少なかったであろう。

こうした事柄に道徳家は目をつぶろうとするし、自分たちも他の人にも1万人もの男盛りが性欲をもたない、あるいは空腹がひどければ、楽に性欲を抑えられると、信じさせようとする。しかしそのような考えはまったく非現実である。こうした男たちは飢えを和らげるのに自分たちのそれぞれのやりかたでなんとかするものである。そういうことは昔からやってきたことだし、もしきちんとした制度がなけ

ればだれかが犠牲にならない。だれかの妻か、娘か、白人だろうが、黄色人種だろうが、黒人だろうが、だれかが。性に飢えた兵士には良心などというものはなく、むしろ自分のいる国が自分の飢えを満たす糧を与える義務があるとしばしば思うものである。

...

男としては私は日本のサービス提供の売春制のプラスの点を理解できる。それは男たちを満足させ、現地の女性たちが辱めをうけたり、不自然な性関係に陥るのを未然に防ぐ。だが女性の側からの見方は当然異なり、そのような立場はどうみても望ましいものではない。狭い一角に住み込んで、1日に30人も40人も相手をするのだ。ラバウルでは、だいたいにおいて、朝鮮人女性がだまされてこの仕事につかされた、ということになっている。しかし、もしラバウルに住むのでなかったなら、きっと彼女たちは自国のどこか他のところで、もっと悪い条件で、やっぱり苦勞したことであろう。

ここで3つの点を考慮すべきである。一つはトマスが本国をはなれて長期間駐屯している大規模な軍には日本の慰安婦制度のようなものが必要であると言明しているが、これは正しいのか。ということである。たしかに、同じような状況のほかの軍隊では認められており、ヴェトナムや韓国におけるアメリカ合衆国軍もそうである。そうではないと考えるひとは次の文を読んで、トマスがしている説明とは違う説明を提供すべきである。

ブンツラウの街では本部に100人以上の女性及び少女がいる。彼女たちは司令本部から遠くない別の棟に住んでいるが、そこには警備員がいないので、多くの不祥事があり、ときには女子寮に夜中別の兵士たちが入ってきて、女たちを脅すという強姦事件すら起こる。5月5日の夜遅く、60人の将校と兵士が入り込んだがそれは主として第三タンク軍からであった。ほとんどが酔っており、女性や少女たちを襲った。指揮官から寮を離れるように命令されていたのに、タンク軍の兵士たちは指揮官を銃で脅かし、乱闘になった。これは決してただの「偶発事件」ではない。これが毎晩おこって、そのためブンツラウにいる女性は怖がって気力を失い、大きな不満がひろがっていた。そうした女性のひとりマリア

シャポヴァルは「私は赤軍が来るのを夜も昼も待っていました。解放されるのを待っていたのに、なんと今は私たちの国の兵士がドイツ人よりもっとひどい扱いをするのです。もう生きているのはいやです。」「ドイツ人のところにいるのはとても大変でした。」とクラウディア マラシエンコはいった。でも今はとても不幸です、これは解放でもなんでもありません。ひどい仕打ちです。私たちにひどいことをします。」

将校たちも女たちに多くの不祥事をおこしている。2月26日に3人の将校が女子寮の食料庫に入り込み、指揮官のソロヴィエフ 少佐が止めようとする、そのひとり（かれは少佐だった）がいま前線からもどったばかりだ、女が要る。」といった。そしてそのままかれは寮で欲に溺れてしまった。[. \[AB\]](#)

上に記された暴挙はソヴィエト軍が、自分たちが「解放した」ソヴィエトの女性に犯したものである。もう一度くりかえすが、ドイツ空軍も日本軍も（1937年の南京は別として）敵国の女性に対してこのようなことをしたと非難されていないし、ましてや自国の女性にはない。なぜか？ ネルソンや吉見氏のような左翼の歴史家た

ちからはそれにたいする答えはない。日本軍は慰安婦所を設備するべきではなかったと吉見氏は論じる。それによるありうべき帰結を指摘されると、リベラルや左翼は解決は軍も戦争もないことであるという。ウクライナは、いまになってこのような方策がいかに効果的であることを発見し、日本もまた自分でそのことの価値を思い知らされる前に早く目を覚ましてほしいものである。) 今日啓蒙の時代にあつて、われわれは、イスラム世界においてすら、近代においてみられなかったほどの大規模な奴隷制が公衆でのせり市をふくんで復活しているのを経験している。このことはアメリカ軍がイラクから時期尚早に引き上げたことの、直接的かつ予見しうる結果であつたが、この実行は左翼が支持、要求したものであり、かれらはそれで手を洗って引き起こされた帰結にたいしては知らぬ顔をしている。あのヤズディ教徒の女性たちの運命にはむしろ合衆国が多く関わっており、日本軍の慰安婦像よりも彼女たちの彫像こそ彼の地に立てられてしかるべきではないのか。アメリカ人の学校の教科書に彼女たちのことを載せるページはないのだろうか？

しかしもうひとつ考慮すべき点がある。「慰安婦」問題の党「路線」の支持者たちにとってはゴードン トマス

はひとつの困惑の種であり、これに対処するのに、完全に無視するか、あるいはネルソンの示唆にしたがって、実は「自分のみた苦痛が忘れられなかった」せいで、トマスはなぜか日本軍兵士の考えに「感染して」しまい、（かれらにいわせると、日本軍の言い回しを「覚えて」）しまった、とするかのどちらかをとっている。なぜなら、ここにいるのは教育のある、人道的な感覚をもった男で、ジャーナリストかつ編集者でもあって、どう考えても日本の「ナショナリスト」とはいえない彼が、慰安婦を見、彼女たちがどのような扱いを受けているかを、他のどの独立の証人よりもずっと身近に見ているのである。かれは終戦後にこれを書いており、自分が目撃したことが「犯罪」とは考えておらず、自国でも似たようなものがあってもよいのではないかと述べている。当時同じ経験をしたひとが違う見解をもったとはまづ考えられない。

トマスが女たちがきつと騙されてきたのだと思うと心穏やかでなかったのは明らかであるが、（ただネルソン自身認めているが、他の証拠からするとおそらくそのようなケースは一部であって、そこには「長期売春婦たち」もいた）かれが問題を感じていたのはそのことだけであつた。かれは女性たちにたいする犯罪も残酷さもみて

いない。そしてほとんどの女たちは（ここでなければ）もっと悪い条件で韓国の売春宿で働いていただろうと論じている。もしかれが目撃したものが（アウシュヴィッツ レポートの著者）ヴイトルド ピレツキ（Witold Pilecki）がみた「地上の地獄」と同じものであったなら、そんなことを言うはずがない。私の見解ではトマスのこうした言葉こそがベントレーとジークラーと、またその「路線」を担う支持者たちがしている虐待と虐殺の主張は「血の中傷」の最たるものであることの最大の証拠であり、自由国家において学校の教科書にそのような中傷を載せる場所があってはならない。

ネルソンは日本軍が売春所を第三者にまかせず、自分で運営しようとしていたことを「証明」しようと、多くの時間を割いている。だがこのことが問題として論議されたことはないので、わら人形を相手に無駄な戦いをしている。論議されているのは、日本軍が拉致あるいは女性を騙すことに関わっていたのかどうか、それをやったのは韓国の仲買人であったのか、という点である。ニューヨークタイムズですら、日本軍が韓国で拉致に関わったという証拠はないと認めている。欺しがあったかどうかについては決着がついていない。（トマスはこれについてなんの情報も提供していない。）だが日本軍はほとん

ど全く韓国語を話せなかったのだから、多分なかったであろう。もちろんだからといって軍に詐欺の責任がないとはいえないが、しかし「強制的に徴集し、徴用し、武力で圧迫した」というのとは程遠い。

日本対韓国?

最後にもっと重要な点が残っている。ネルソンはアメリカ人が従軍慰安婦に関連した「戦争犯罪」については日本人のだれをも起訴しようとしなかった理由は、かれらが、日本人による他の日本人あるいは「合法的に認められた」日本の植民地すなわち台湾と韓国の人々に対しての犯罪には関心がなかったからだ」と主張している。

これは実に不誠実である。トマスの著作を読んだだれにとってもかれが売春所に関連することが戦争犯罪だというような考えがまったくなかったことは明らかであり、当時他のだれもそう考えていなかったであろう。しかし、かりに、今日の基準からして犯罪である詐欺が、どうやらあったらしいとしたとしても、日本が韓国にたいしてその責任を負うべき犯罪ではない。

韓国は1910年に日本に併合されたが、それまでの5年間は日本の保護領であったが、それはもともとは韓国が（歴史的に専制支配してきた）中国と、韓国占領をねらっていたロシア—1904年-5年にかけて日本が戦った—との手に落ちるのを予防するために確立されたのであった。併合は当時日本の同盟国であったイギリスの支持と援助を得てなされ、アメリカ合衆国もこれを黙認していた。

この併合の口実は1909年に韓国人ナショナリストが日本の韓国統監伊藤博文の暗殺である。伊藤の日本史上の位置付けはアメリカ合衆国の憲法制定者にあたる。皮肉なことであるが、伊藤は韓国併合には強力に反対しており、かれの統監時代、「日本の支配を強めるとともに、韓国人の協力を得られるように、近代化と善意による行政を目指していた。([MP], p. 227) 韓国は文民行政下でその文化的自律性を保持した。併合以後、日本の政策は韓国を近代化し、韓国人民を厳格な軍の規律のもとに日本化してゆくことを目指した。このことが、第一次世界大戦後のウイルソンの理念に刺激されての、1919年の大規模な韓国民族主義者の反乱を招くことになる。この反乱を乱暴に抑圧したことに世界中から抗議が

なされ、そのため自由主義者の原敬が韓国にほとんど完全な自律を与える一連の改革案にとりかかった。韓国語と韓国の歴史が学校で教えられ、韓国人は一時、韓国の歴史でそれまで経験したことの無い大きな政治的自由を享受した。原の暗殺によってこの自由化の歩みは遅くなり、やがて自由化の過程は完全に方向転換して、1930年代までには日本は再び韓国人の国民的同一性を抜本的に否定して、日本へ同化させるという方針をとっていた。

日本の韓国政策ともうひとつの植民地である台湾への政策は多くの点でイギリスのアイルランド政策に似ており（この比較は日本の自由主義者たとえば清沢冽がしている）[\[KK\]](#) またロシアがとくに1863年一月の最初の蜂起に失敗して、自律の最後の痕跡を絶ったあとのポーランド政策に、もっとよく似ている。現地の国語と文化の抑圧とともに現地の人民に、自国の行政の低いレベルでの参加を認めるという方策である。日本人の要求に自発的に同意し、忠誠であるとみなされた韓国人は中間レベルまで出世でき、ときには警察や行政の政治においてもっと高い地位に就くことができた。おなじような方針がもうひとつの植民地台湾でも採られ、ここでは抵

抗はもっと少なく、日本人は韓国におけるような程度の抑圧措置を採らなくて済んだ。

韓国および台湾における日本の同化政策は、期間は短い
が、ロシアのポーランド政策よりも、またイギリスのアイ
ルランド政策よりもずっとうまくいっていたことは間違いない。これはひとつには日本の警察および行政制度
の効率性のゆえであり、また日本の支配が始まった当
時、韓国も台湾もかなりの後進地でそこに日本が教育、
保健、技術、そして一般的な生活水準の向上をもたらした
ということもある。その結果日本の支配への許容と協
力の程度はずっと大きかった。とくに韓国より台湾でそ
うであるが、ともに、ロシアの支配下のポーランドある
いはイギリス人下のアイルランド カトリック地域にく
らべればずっと協力的である。(占領勢力と現地の人民と
の間の宗教的な相違が占めた役割もある。)日本と合衆国
を含む西欧列強との関係が良好な限りは、日本の植民地
支配についての西欧の見解は、きわめて好意的であっ
た。

この理由で、また日本人の能率のよさがこの努力
を成功にみちびき、この段階では西欧の日本植民
地主義にたいするコメントは圧倒的に好意的で

あった。台湾や韓国を訪問したイギリス人やアメリカ人は日本の行政下における台湾の「驚くべき進歩」について、また「何世紀にもわたった民族的政治的衰退」のあとの韓国における日本の行政の「勇気と献身と洞察」について熱をこめて語った。

ごく少数の観察者だけがこの溢れるばかりの賞賛を訂正して、日本人の植民主義がひどく全体主義的であり、搾取的でもあって、台湾人は植民支配者に愛着をもたず、韓国人の日本人支配にたいする態度は怒りと絶望に満ちている、と記している。たしかに、海外からのこうした寛大なみかたは、少なくとも外側から見る限り、ヨーロッパの国の植民政策によく似ているという事実によるところが大きい[MP]

太平洋戦争期には韓国人も台湾人も日本帝国軍に従軍した。初期段階ではかれらは労働大部隊に徴集されたが、戦闘部隊に志願することができた。約20万人が志願した。そこに朴正熙も含まれていた。かれは後に韓国の大統領・独裁者であり、朴槿恵現大統領の父親である。

(かれは日本のエリートコースである陸軍士官学校で教育を受けたが、満州に日本が設立した傀儡国家 満州国の

軍将校として服務した。) 2万7千人以上の台湾人と2万一千人の韓国人の志願兵が戦死し、靖国神社に祀られている。多くの韓国人と台湾人が、恐れられた軍の秘密警察である憲兵隊に補助員として服務した。多くは捕虜収容所の監視員を務め、特に残虐だったという評判を得ている。23名の韓国人が(一名の大將、洪思翊 (ホンサイク) を含む)と26名の台湾人が戦後連合国によってBC級戦犯として処刑された。

トマスが知っていた韓国人と台湾人はもともとは非戦闘の労働区に属していた。トマスはラバウルには約千人の韓国人労働者がおり、そのうちの一人がかれに韓国の慰安婦が騙されたといったと述べている。トマスは多くの台湾人とも知り合いになった(かれは台湾人をフォルモサ(台北)人といっている)。かれらはもと民間人で、書記とか整理員、連絡員などの仕事についていたが、1944年の6月には戦闘隊にならされた時、トマスによると、それにはかれらは複雑な気持ちを抱いたのであった。

台湾人の態度と振る舞いに変化が起こり、トマスはそれは戦争に疲れて、かれらが日本に反感をもつようになって

たことのひとつの印だといっている。台湾人は自国語で話すようになり、それは厳しく禁じられていたのだが、日本人将校の前でも平気で話したが、かれらは気づかなかったという。そのうちの一人はトマスに『もう日本はだめだ』といった。ネルソンにいよるとラバウルには283人の台湾人「慰安婦」がいたという。（トマスは彼女たちのことはなにもいっていない。）

ゴードン トマスは太平洋戦争は主として人種間の戦いであり「色の戦争」とみている。かれが「アイスウオーター」を韓国人の慰安婦テイツイーにもってゆくのを拒否したとき、そして彼女が日本人監視員にそれを訴えたとき、監視員が彼女の側に立つに決まっているとおもった。またかれはあの「黄色人種」たちの大部分は、少なくとも勝っている間は日本人側につくだろうとはつきり思っていた。これは、慰安婦を含め、韓国人にも当てはめられた。

太平洋戦争期の日本の公式のイデオロギーには人種間の平等も謳われていた。それゆえたまたま日本人の支配下にいたユダヤ人をドイツがなにと拘束するように要求しても拒否したのである。満州の関東軍は満州からユダヤ人亡命者を追放するようにというドイツの要求に極めて

強い言葉で拒否の返答をしている。ドイツ人が抗議したにもかかわらず、ドイツのパスポートをもつユダヤ人はあくまでドイツ市民として待遇した。そのひとりのヨゼフ ローゼンシュトック (Joseph Rosenstock) , は日本交響楽団の指揮者に選ばれ、太平洋戦争中ずっと、主としてドイツ音楽のコンサートを開催した。 ([BAS](#)).

もちろん実際には異なったグループはそれぞれ様々に異なった待遇を受けた。日本人は自分たちの管理下にはいった国々に対しては、基本的により信頼のおける者はよりよい待遇をした。そのため、だいたいにおいて日本の側にたつビルマやインドネシアのような国に対しては、だいたいアメリカ人により忠誠的であったフィリピン人に対してよりもずっと穏便であった。当然のことながら、どの国民もそうであるが、日本人の個人個人はそれぞれ好き嫌いや偏見があった。

このように、日本人慰安婦と韓国人慰安婦と過ごす30分間の価格が50銭違うのは「人種差別」であるという、ネルソンの非常に不公平な主張にもかかわらず、「慰安婦問題」が日本人、韓国人、中国人、そして他の国民や政府に関わる問題とみなすべきであるという見解にはなにひとつ根拠がないのである。どちらの側から

も、国民性とか人種とかが関わっていたという証拠はなにもない。

日本がすでに戦争行為について、また韓国の植民地化についてすでになんども謝罪しているという事実にもかかわらず、さまざまなサークルから、とくに韓国であるが他の国からも、さらなる謝罪とかつての慰安婦にたいする賠償を（つまりは韓国と中国に）要求する声がひっきりなしに叫ばれている。これは1965年の協定で、日本と、現大統領の父親に率いられた韓国政府の間で、

（多くの日本からの大量の援助、借款、保証金と引き換えに、）これらの出来事についての主張はすべて決着すると、署名されたにもかかわらず、である。他方、日本国内では1993年に河野洋平氏によってなされた謝罪を取り消すべしという声もある。それが吉田氏の今や信頼性のない主張にもとづいたものだったのだから、というのである。実際日本がこれ以上謝罪するのを拒否すべきだという理由は十分根拠がある。[\[ABR\]](#). しかしながらトマスの著書を注意深く調べて、私は河野の謝罪は取り消すのではなく、訂正されるべきであると考えてるほうに傾いている。むしろこれは「条件付き」謝罪とすべきであり、その謝罪の対象は国籍は関係なく（日本人も、ということである）だれでも、騙されたり、うまく操ら

れたりして、売春へとひきづりこまれ、帰りたいと願ったのに、家に帰ることをを許されなかった女性たちである。いったいどれほどの数の女性がいたのか、それが誰なのかを知ることができないのであるから、政府はこれ以上のことはできない。もちろん1995年の協定があるゆえに、公式な補償の可能性はないから、しそれを望むひとたちが献金するプライベートな資金をもちいるべきである。実際これがドイツ政府のとった方法であり、政府としては第二次世界大戦についてでてくる主張はすべて決着済みであるが、任意で合法的な形で支払われることは許可している。

実際のところ、戦時の振る舞いの罪滅ぼしをする適切な方法についてのメルケル首相が日本人にしたお説教にもかかわらず、ドイツはドイツ人の手で巨大な破壊を被ったポーランドに（その人口の5分の一を失っている）日本が韓国に支払ったよりもずっと少額しか払っていない。それに、すでに述べたように、ドイツは自身のもと「慰安婦たち」のだれにも、謝罪も、ましてや補償もしていない。こういうこともベントレー、ジークラー両氏はお忘れのようである。

結論

アメリカの保守主義者の大多数は日本が共産国中国からますます増大する脅威を受けていることを理解している。それは単に尖閣島についての争い、ということではなく、共産主義国中国が東アジアにおける「伝統的な」支配を復活させようという決意に関する争いでもある。ロシアのウクライナにたいする攻撃と中国の日本にたいする脅威の増大には多くの著しい類似点がある。ウクライナも日本も自国の防衛能力よりも国際協定に頼っている。1991年のソヴィエト解体後ウクライナは中国を凌ぐ、世界三位の軍隊を受け継いだ。その3年後、ウクライナはその巨大な核兵器を、合衆国、イギリス、ロシアによる国際安全「保障」（フランスと中国は別々の協定を結ぶことを提案した）と、資金による補償（これは墮落した官吏のポケットにはいつてしまった）と引き換えることにした。ウクライナはその強力な軍を潰しにかかった。ほとんどだれもそれにたいして警告するものはなかった。日本は第二次世界大戦後、憲法によって世界のうちただひとり、自己防衛の権利を剥奪された。日本の平和主義者にとっては平和憲法は永年誇りの種であった。それは日本を、真の「平和を愛する」唯一の国にしたのである。毛沢東と鄧小平の中国は日本に対してなに

も領土上の要求をしなかったし、過去について議論することに関心がなく謝罪すら求めなかった。

田中角栄首相が毛主席を訪問して外交関係をたて、（ニクソンが米中間でしたように）そして日本の戦時における行為にたいする謝罪をしようとしたとき、毛はその典型的な皮肉をもって答えた。【あなたがた抜きではわれわれは決して権力を握れなかった。だから、ね。なにも全く謝ることはないのですよ。】と。この態度は、中国の共産党支配が日本をまだ必要としていると感じている限り、そしてとくに日本がかれらに求める以上の、日本からの投資と善意を必要とする限り、そしてまたかれらがアジアで、軍事的にアメリカが味方している日本と対決するにはまだまだ自分たちが弱すぎると感じている限りは、続いたのであった。中国の経済力と、軍事力が伸びてくるにつれ、そしてとくにオバマの伝統的な同盟国を切り捨てるという方策がその効果を発揮するようになって、中国の態度が変わり始めた。無人の尖閣島は「中国の古き聖地」となり、これまで共産党員がまったく興味をもたなかった日本の戦時の虐殺が、中国メディアのおきまりのテーマとなったのみならず、その数も規模も指数倍的に増加し、今や大量の軍建設がはじまり脅威と挑発はすでに日常茶飯事になっている。

ロシアがウクライナ攻撃において示したように、歴史は効果的な宣伝の武器として使われうる。ウクライナの歴史は複雑であり、西欧ではあまり理解されておらず、それは日本の歴史も同様である。ちょうどロシアがウクライナの歴史を用い、これを歪めてウクライナの民主主義的な親西欧政府を「ファシスト」の烙印を押したように、中国はまったく同じやり方で、穏健な保守派の民主主義的安倍晋三内閣を鬼に仕立て、それに「超国家主義」のラベルを貼ろうとしている。

その理由は明白である。マイダン革命後に権力についたウクライナ政権は安部政権同様、かつてのツァー帝国あるいはソヴィエト帝国を再建しようとするロシアの野心にとって大きな脅威である。安部政権ははつきりと日本を「普通の国」にする、自国の軍事力によってまた他の、同じような安全についての関心をおなじくする他の国々との同盟を通じて自国を防衛できる国にするという意図を打ち出しており、これは東アジアにおける覇権という歴史的役割を回復しようという野心の邪魔になるのである。

もちろんウクライナと日本との間には相似性もあるとともに、相違点もある。アメリカ合衆国に自国の安全を頼ってきたすべての国はオバマの世界におけるアメリカ

の役割を意識的に減らし、これまでの同盟国を切り捨てて、敵国に寄り添おうとする方針の犠牲になってしまったのである。そのうち影響をもろに受けている4カ国がイラク、ウクライナ、イスラエル、そして日本である。ウクライナに比べると、日本はより強力で健全な経済力をもち、アメリカ合衆国と正式な安全保障条約があるという利点がある。（もっともこの条約の価値はますます疑わしいものになっていきているが。）しかし一つの点で日本はウクライナより悪い状況にある。その理由は奇妙な韓国事情である。理性的論理的に考えれば韓国は上の国々につながる第5番目の国であり、他のどの国よりも多く日本と共通の利害をもっているのである。ところが韓国と日本との関係は戦後のいつの時代にくらべても悪化しており、ほとんどグロテスクなレベルにまで到達している。その著しい例は1913年、韓国も日本も平和維持軍をおいている南スーダンで起こったことである。一時韓国部隊が切迫した脅威に直面し、弾丸が不足した。適合する弾径の弾丸は日本人がもっているものだけで、直ちに日本部隊は韓国に提供した。しかしこれが韓国であまりの騒ぎになったため、結局返却しなければならなかった。皮肉なことに日本と国交正常化し、補償

協定にサインした朴正熙もと大統領の娘の朴槿恵が大統領に選ばれて以後もっと関係は悪化したのである。

韓国のナショナリズムの中心には被害者意識があり、日本は加害者であり国の敵という役割におかれている。韓国の学者リーチョンシクによると[\[MP\]](#)

日本は韓国を征服し支配したことで、韓国のナショナリズムを目醒せ、これを支えてきた。日本は韓国のナショナリズムにとって否定的な、しかし強力なシンボルである。国家の敵である。

被害者性が国家の同一性の中心的要因でありながら、そこに殉教者が欠けており、協力者が多くある場合、もっとも容易な解決法は前者を後者に転換することである。これはグロテスクな形をとることもあり、ちょうど2006年、韓国政府がめだためように、日本軍捕虜収容所にいた韓国人監視員で戦後戦争犯罪と「人道に対する罪」に問われた者の数(23名が処刑された)。を日本の帝国主義の犠牲者の数に書き換える許可をあたえたのである。当然のことながら韓国には日本からこれらの「犠牲者」に対しても賠償を要求する声があがった。慰安婦問題も韓国にその被害者意識をさらに育てる道を提供した

のである。もちろん韓国の残虐な監視員とちがって、慰安婦たちの多くは本物の犠牲者であったが、しかしその犠牲度がどれほどでその性格がどういう種類のものであれ、それを韓国の殉教者の神話の一部に仕立て上げようという試みに説得力がないのは収容所の監視員のケースが無理であるのと同じである。

中国はこれをもっと冷静に利用している。中国の日本を鬼とし、日本に対する憎しみを広げようとする世界規模の宣伝戦はプーチンがウクライナにたいして用いているのと同じ目的をで、同じ方法を用いている。（他にもあるがたとえばインターネットトロールで反日コメントをソーシャルメディアで載せるのにお金を払うなど）。

その一つの例はをールストリートジャーナルでマイケルアウスリン（[web link](#)）が言及している。[MA].2014年、史上はじめて日本人に本来の市民権を与えた明治憲法の父、伊藤博文の暗殺者を記念するものである。

[HI]. もっとも重要なのは憲法が完全に独立した司法制度を打ち立て、最高裁判所の裁判官が選ばれたらそれは生涯続き、政治的な理由で外されることがないとしたことである。この制度は戦争中もずっと続き、それは今日の中国やプーチンのロシアでは想像もつかないことで

ある。たとえば1942年日本で総選挙が行われ、政府の「非推薦」であった85人の立候補者が選ばれている。日本のもっとも有名な自由主義的政治家尾崎行雄は選挙運動中に不敬罪で逮捕されている。裁判のなかで彼は首相の東城が憲法違反をしており、国民の自由を剥奪していると非難した。かれは有罪と判決されたが健康上の理由で釈放されたかれは最高裁判所に控訴し、最高裁は無罪を言い渡し、かれはふたたび選出された。もうひとりの自由主義者斎藤隆夫は支那事変を批判して国会から追放されたが、選挙に出ることは許され、選出された。芦田均は合衆国の捕虜の人道的な扱い扱いをたたえたため、逮捕されたが裁判にはかけられず、国会議員に選ばれた。[BAS]

戦時中の日本は民主政からは程遠いが全体主義からも遠く、今日の中国の半全体主義からもほど遠かったが、しかし中国やロシアとちがって、日本の国法は厳密かつ効果的に適用された。

日本の法廷、官僚、そして警察がこのように独立していることからして、日本軍によって、韓国あるいは日本の女性たちが拉致され、弾圧されたというのがそもそも、

ありそうにない話なのである。実際すでに述べたように、吉見氏の見つけた資料は警察が拉致の試みを予防し、犯人を逮捕したと述べている。

このような大量の憎しみがあるからにはなにかしらそれに見合う量の害悪を憎しみの対象から憎しみの当事者が受けたのであろうと仮定するのが自然であろう。しかしながら、我々が思うほと人は理性的ではなく、とくにナショナリズムが関わってくると屈辱の思いは身体的な行為よりも大きな意味をもつ。この種の感情は必ずしも被った実際の危害に関連するわけではなく、むしろ国の劣等感に由来する場合もあるということが、あるひとつの一見無関係な事実から見えてくる。韓国はユダヤ人がいない国であるが、イスラエルとは友好的関係をもっており、それでいてもっとも反ユダヤ主義的な国のひとつであり、中東以外では唯一反ユダヤ主義である。

[ADL]この統計結果が最初に発表されたとき、それはひどく世界を仰天、させ驚愕させたものである。韓国人は調査をされたときに質問を誤解した唯一の国だったのだろうか？だが「ユダヤ人は世界中の戦争のほとんどに責任がある」という質問に38パーセントの韓国人がその通りだといっているが（日本人はただ11パーセントにすぎない）これが誤解のゆえとは思えない。もっと意味

があるとおもわれるのは、40%の韓国人が「ユダヤ人はホロコーストで自分たちに何が起こったかを今でもいいすぎる」というのにイエスといっている。（日本人は18%がイエスといっている）。

韓国によくみられるこの種の意見の皮肉さは必然的である。：この国は電子製品や自動車とともにみずからの被害者意識を海外に輸出しようとするだけでもっとも有名である。それはカルフォルニアの記念碑という形であれ、あるいは「ウォールストリートにおける記事であれ。[\[CML\]](#)（ウォールストリートは不思議な理由で中国や韓国からのこの種の製品の主要な輸出先になっている。）

韓国の反ユダヤ主義はユダヤ人とは事実上なんの接触もなくして生まれており、純粹に神話のうえに出てきたものであるが、それは興味深い現象でありながらあまり議論されていない。おそらくそれはこの話題が都合が悪かったり、恥ずかしかったりするグループが多すぎるからであろう。

韓国人が日本を真っ向から憎む理由とこれとはかけはなれているようにみえるかもしれないが、しかしこの二つ

は多くの共通点がある。ひとつにはともにこれが朴正熙の独裁時代の遺産であること、つまり日本もイスラエルも、韓国人が真似るべき手本として示されたことで、劣等感と極端な国民的野心と、そして被害者意識とに悩む国民に嫉妬と悪魔化の基礎を与えたのである。

実際、多くの韓国人の憧憬と羨望と憎しみとがむすびついた今日の日本に対する態度は、大戦時多くの日本人が西欧にたいしていただいていた態度と平行している。その両方の場合に、反ユダヤ主義は奇妙な副作用であった。

（日本人の場合は清沢浄の「暗黒日記」の各所に言及されている。[\[KK\]](#).)

文献

[AB] Antony Beevor, *Berlin, The Downfall 1945*

[ABR] Andrew Browne, *For Japan, a difficult Art of Saying It's Sorry*, The Wall Street Journal, January 13, <http://www.wsj.com/articles/for-japan-a-difficult-art-of-saying-its-sorry-1421127266>

[ADL] ADL GLOBAL - *An Index Of Anti-semitism*

<http://global100.adl.org/#country/south-korea>

[AM] Christofer Andrew and Vasili Mitriokhin, *The World was going our way. The KGB and the battle for the third world.* Basic Books 2005

[AD] Alexis Dudden at el., *Standing with Historians of Japan,* Perspectives on History , March 2, 2015

[AR] Andrew Roberts, *The Storm of War,* Harper 2012

[BAS] Ben-Ami Shillony, *Politics And Culture in Wartime Japan,* OUP, 1981

[BZ] J.H. Bentley and Herbert F. Ziegler, *Traditions and Encounters: A Global Perspective on the Past,* McGraw-Hill, 2011

[CSS] C. Sarah Soh, *The Comfort Women, Sexual Violence and Postcolonial Memory in Korea and Japan,* The University of Chicago Press 2008

[CT] Christina Twomey, *Australia's Forgotten Prisoners,* CUP 2007

[CML] Chung Min Lee, *Shinzo Abe's Duty to History,* The Wall Street Journal, April 16, 2015

http://www.wsj.com/article_email/shinzo-abes-duty-to-history-1429203445-1MyQjAxMTA1NzI1MDIyNDA0Wj

[CA] Commitee for Accuracy in Middle East Reporting in America, *Indicting Israel: New York Times Coverage of the*

Palestinian-Israel Conflict, http://www.camera.org/index.aspx_context=2&x_outlet=35&x_article=2351

[CG] Cezary Gmyz, *Seksualne niewolnice Trzeciej Rzeszy* (Sexual slaves of the Third Reich) (in Polish) <http://www.wprost.pl/ar/105285/Seksualne-niewolnice-III-Rzeszy/>

[GT] Gordon Thomas, *Rabaul 1942-1945 An Account of Four Years As a Prisoner of War of the Japanese*, typescript. Photocopy.

[HI] Hirobumi Ito, Miyoji Ito, *Commentaries on the constitution of the empire of Japan*

[HK] Hisae Kennedy, *The anatomy of a falsehood* (<http://www.sdh-fact.com/essay-article/369>)

[HM] Helen Mears, *Mirror for Americans* 1948

[HN] Hank Nelson, *The New Guinea Comfort Wemen, Japan and the Australia Connection: out of the shadows* <http://japanfocus.org/-Hank-Nelson/2426>

[HA] The Hankyoreh, *American historians issue statement opposing Japanese PM's efforts to alter history textbooks*, http://www.hani.co.kr/arti/english_edition/e_international/677330.html

[HOL] *HOLODOMOR 1932-33*, http://www.holodomor.org.uk/Journalists/Walter_Duranty.aspx

[IH1] Ikuhiko Hata , *No Organized OR Forced Recruitment. Misconceptions About Comfort Wemen And The Japanese Military* , http://www.sdh-fact.com/CL02_1/31_S4.pdf

[IH2] Ikuhiko Hata, *Continental Expansion, 1905-1941*, Cambridge History of Japan vol 6.

[IH3] Ikuhiko Hata et al, *Requesting Correction of Factual Errors in McGraw-Hill Textbook*, letter by 19 Japanese historians.

[JC] Judith Curry, *The Global Warming Statistical Meltdown*, The Wall Street Journal, 9 October 2014, <http://www.wsj.com/articles/judith-curry-the-global-warming-statistical-meltdown-1412901060>

[JF] The Asia Pacific Journal, Japan Focus, *Reexamining the “Comfort Women” Issue, and interview with Yoshimi Yoshiaki*, The Asia-Pacific Journal, Vol. 13, Issue 1, No. 1, January 5, 2015, <http://japanfocus.org/-Yoshimi-Yoshiaki/4247>

[JFRJ] J.F.R. Jacob, *An Odyssey in War and Peace*

[JT] The Japan Times, *Japanese historians seek revision of U.S. textbook over ‘comfort women’ depiction*, <http://www.japantimes.co.jp/news/2015/03/18/national/history/japanese-historians-seek-revision-of-u-s-textbook-over-comfort-women-depiction/#.VSZ4r1yIfKx>

[LK] Leszek Kołakowski, *Main Currents of Marxism*, Clarendon Press, Oxford, 1978

[KK] Kiyosawa Kiyoshi , *A Dirary of Darkness, Translated by Eugene Sowiak and Kamiyama Tamie*, Princeton University Press 1999

[LADN] Los Angeles Daily News, *Public parks aren't the place for foreign political fights*

http://www.dailycamera.com/ci_23906649/comfort-women-parks-japan-korea

[LL] Laurel Leff, *Buried by the Times. The Holocaust and America's Most Important Newspaper*. Cambridge University Press, 2005

[MA] Michael Auslin, *China's Diplomatic Hate Machine*, The Wall Street Journal, March 27, 2014

http://www.wsj.com/news/article_email/SB10001424052702304418404579464961123578976-1MyQjAxMTA0MDMwMTEzNDEyWj

[MH] *Cuban Prostitutes See Sex Trade As Necessity*, http://articles.orlandosentinel.com/1995-04-30/news/9504290703_1_prostitution-cuba-young-woman

[MP] Mark R. Peattie, *The Japanese Colonial Empire, 1895-1945*, Cambridge History of Japan, vol 6.

[MS] Mark Simkin, *Silence Broken on Australia's worst maritime disaster*,

<http://www.abc.net.au/7.30/content/2003/s961016.htm>

[NYT] *Japanese Right Attacks Newspaper on the Left
Emboldening War Revisionists*

<http://www.nytimes.com/2014/12/03/world/asia/japanese-right-attacks-newspaper-on-the-left-emboldening-war-revisionists.html?partner=rss&emc=rss&smid=tw-nytimes&r=2>

[PH] Peter Hoffman, *The History of the German Resistance*, McGill-Queen's University Press, 1996

[WP] Rittmeister Witold Pilecki's Auschwitz Report

<http://www.polandpolska.org/dokumenty/witold/raporty-witolda.htm>

[SF] Sam Falle, *My Lucky Life, In War, Revolution, Peace&Diplomacy* 2004

[TN] Tsutomu Nishioka - *The Comfort Women Issue In Sharper Focus* - <http://www.seisaku-center.net/sites/default/files/uploaded/>

[USS] UNITED STATES STRATEGIC BOMBING SURVEY, SUMMARY REPORT, (Pacific War) <http://www.anesi.com/ussbs01.htm#jo>

[WSJ1] The Wall Street Journal, *Abe's view of history clouds U.S.-Japan Ties*

<http://www.wsj.com/articles/abes-view-of-history-clouds-u-s-japan-ties-1424163671?KEYWORDS=Comfort+Women>

[WSJ2] The Wall Street Journal, <http://blogs.wsj.com/chinarealtime/2014/06/24/writing-china-peipei-qi-chinese-comfort-women/>

[MMN] Maggie McNeill, *Honolulu Harlots*, <https://maggiemcneill.wordpress.com/2011/07/05/honolulu-harlots/>

Bibliography

[AB] Antony Beevor, *Berlin, The Downfall 1945*

[ABR] Andrew Browne, *For Japan, a difficult Art of Saying It's Sorry*, The Wall Street Journal, January 13, <http://www.wsj.com/articles/for-japan-a-difficult-art-of-saying-its-sorry-1421127266>

[ADL] ADL GLOBAL - *An Index Of Anti-semitism*

<http://global100.adl.org/#country/south-korea>

[AM] Christofer Andrew and Vasili Mitriokhin, *The World was going our way. The KGB and the battle for the third world*. Basic Books 2005

[AD] Alexis Dudden at el., *Standing with Historians of Japan*, Perspectives on History , March 2, 2015

[AR] Andrew Roberts, *The Storm of War*, Harper 2012

[BAS] Ben-Ami Shillony, *Politics And Culture in Wartime Japan*, OUP, 1981

[BP] Brandon Palmer, *Fighting For The Enemy, Koreans in Japan's War, 1937-1945*, University of Washington Press, 1970

[BZ] J.H. Bentley and Herbert F. Ziegler, *Traditions and Encounters: A Global Perspective on the Past*, McGraw-Hill, 2011

[CSS] C. Sarah Soh, *The Comfort Women, Sexual Violence and Postcolonial Memory in Korea and Japan*, The University of Chicago Press 2008

[CT] Christina Twomey, *Australia's Forgotten Prisoners*, CUP 2007

[CML] Chung Min Lee, *Shinzo Abe's Duty to History*, The Wall Street Journal, April 16, 2015

http://www.wsj.com/article_email/shinzo-abes-duty-to-history-1429203445-1MyQjAxMTA1NzI1MDIyNDA0Wj

[CA] Committee for Accuracy in Middle East Reporting in America, *Indicting Israel: New York Times Coverage of the Palestinian-Israel Conflict*, http://www.camera.org/index.asp?x_context=2&x_outlet=35&x_article=2351

[CG] Cezary Gmyz, *Seksualne niewolnice Trzeciej Rzeszy* (Sexual slaves of the Third Reich) (in Polish) <http://www.wprost.pl/ar/105285/Seksualne-niewolnice-III-Rzeszy/>

[GT] Gordon Thomas, *Rabaul 1942-1945 An Account of Four Years As a Prisoner of War of the Japanese*, typescript manuscript. Photocopy.

[HI] Hirobumi Ito, Miyoji Ito, *Commentaries on the constitution of the empire of Japan*

[HK] Hisae Kennedy, *The anatomy of a falsehood* (<http://www.sdh-fact.com/essay-article/369>)

[HM] Helen Mears, *Mirror for Americans* 1948

[HN] Hank Nelson, *The New Guinea Comfort Wemen, Japan and the Australia Connection: out of the shadows* <http://japanfocus.org/-Hank-Nelson/2426>

[HA] The Hankyoreh, *American historians issue statement opposing Japanese PM's efforts to alter history textbooks*, http://www.hani.co.kr/arti/english_edition/e_international/677330.html

[HOL] *HOLODOMOR 1932-33*, http://www.holodomor.org.uk/Journalists/Walter_Duranty.aspx

https://www.wiso.uni-hamburg.de/fileadmin/wiso_vwl/johannes/Ankuendigungen/Berlin_twoconceptsofliberty.pdf

[IH1] Ikuhiko Hata , *No Organized OR Forced Recruitment. Misconceptions About Comfort Wemen And The Japanese Military* , http://www.sdh-fact.com/CL02_1/31_S4.pdf

[IH2] Ikuhiko Hata, *Continental Expansion, 1905-1941*, Cambridge History of Japan vol 6.

[IH3] Ikuhiko Hata et al, *Requesting Correction of Factual Errors in McGraw-Hill Textbook*, letter by 19 Japanese historians.

[JC] Judith Curry, *The Global Warming Statistical Meltdown*, The Wall Street Journal, 9 October 2014, <http://www.wsj.com/articles/judith-curry-the-global-warming-statistical-meltdown-1412901060>

[JF] The Asia Pacific Journal, Japan Focus, *Reexamining the “Comfort Women” Issue, and interview with Yoshimi Yoshiaki*, The Asia-Pacific Journal, Vol. 13, Issue 1, No. 1, January 5, 2015, <http://japanfocus.org/-Yoshimi-Yoshiaki/4247>

[JFRJ] J.F.R. Jacob, *An Odyssey in War and Peace*

[JT] The Japan Times, *Japanese historians seek revision of U.S. textbook over ‘comfort women’*

depiction, <http://www.japantimes.co.jp/news/2015/03/18/national/history/japanese-historians-seek-revision-of-u-s-textbook-over-comfort-women-depiction/#.VSZ4r1yIfKx>

[LK] Leszek Kołakowski, *Main Currents of Marxism*, Clarendon Press, Oxford, 1978

[KK] Kiyosawa Kiyoshi , *The Dirary of Darkness*, Translated by Eugene Sowiak and Kamiyama Tamie, Princeton University Press 1999

[LADN] Los Angeles Daily News, *Public parks aren't the place for foreign political fights*

http://www.dailycamera.com/ci_23906649/comfort-women-parks-japan-korea

[LL] Laurel Leff, *Buried by the Times. The Holocaust and America's Most Important Newspaper.*, Cambridge University Press, 2005

[MA] Michael Auslin, *China's Diplomatic Hate Machine*, The Wall Street Journal, March 27, 2014

http://www.wsj.com/news/article_email/SB10001424052702304418404579464961123578976-IMyQjAxMTA0MDEwMTEzNDEyWj

[MH] *Cuban Prostitutes See Sex Trade As Necessity*,
http://articles.orlandosentinel.com/1995-04-30/news/9504290703_1_prostitution-cuba-young-woman

[MP] Mark R. Peattie, *The Japanese Colonial Empire, 1895-1945*, Cambridge History of Japan, vol 6.

[MS] Mark Simkin, *Silence Broken on Australia's worst maritime disaster*,

<http://www.abc.net.au/7.30/content/2003/s961016.htm>

[NYT] *Japanese Right Attacks Newspaper on the Left Emboldening War Revisionists*

http://www.nytimes.com/2014/12/03/world/asia/japanese-right-attacks-newspaper-on-the-left-emboldening-war-revisionists.html?partner=rss&emc=rss&smid=tw-nytimes&_r=2

[PH] Peter Hoffman, *The History of the German Resistance*, McGill-Queen's University Press, 1996

[WP] Rittmeister Witold Pilecki's Auschwitz Report

<http://www.polandpolska.org/dokumenty/witold/raporty-witolda.htm>

[SF] Sam Falle, *My Lucky Life, In War, Revolution, Peace&Diplomacy* 2004

[TN] Tsutomu Nishioka - *The Comfort Women Issue In Sharper Focus* - <http://www.seisaku-center.net/sites/default/files/uploaded/>

[USS] UNITED STATES STRATEGIC BOMBING SURVEY, SUMMARY REPORT, (Pacific War) <http://www.anesi.com/ussbs01.htm#jo>

[WSJ1] The Wall Street Journal, *Abe's view of history clouds U.S.-Japan Ties*

[http://www.wsj.com/articles/abes-view-of-history-clouds-u-s-japan-ties-1424163671?](http://www.wsj.com/articles/abes-view-of-history-clouds-u-s-japan-ties-1424163671?KEYWORDS=Comfort+Women)
KEYWORDS=Comfort+Women

[WSJ2] The Wall Street Journal, <http://blogs.wsj.com/chinarealtime/2014/06/24/writing-china-peipei-qiuchinese-comfort-women/>

[MMN] Maggie McNeill, *Honolulu Harlots*, <https://maggiecmcneill.wordpress.com/2011/07/05/honolulu-harlots/>

1.